

福岡市

# 宮の前遺跡

—福岡市拾六町宮の前F地点の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第13集

7004

福岡市教育委員会

1971

三宅ツキ

監修

# 宮の前遺跡

—福岡市拾六町宮の前F地点の調査—

福岡市教育委員会

1971



## 序 文

近年、福岡市および周辺地域の開発とともに、各種造成工事の激増ははなはだしいものがあります。ここに報告します拾六町宮の前F地点遺跡もその例にもれず、宅地造成のために止むなく記録保存のための、緊急調査を実施したものであります。

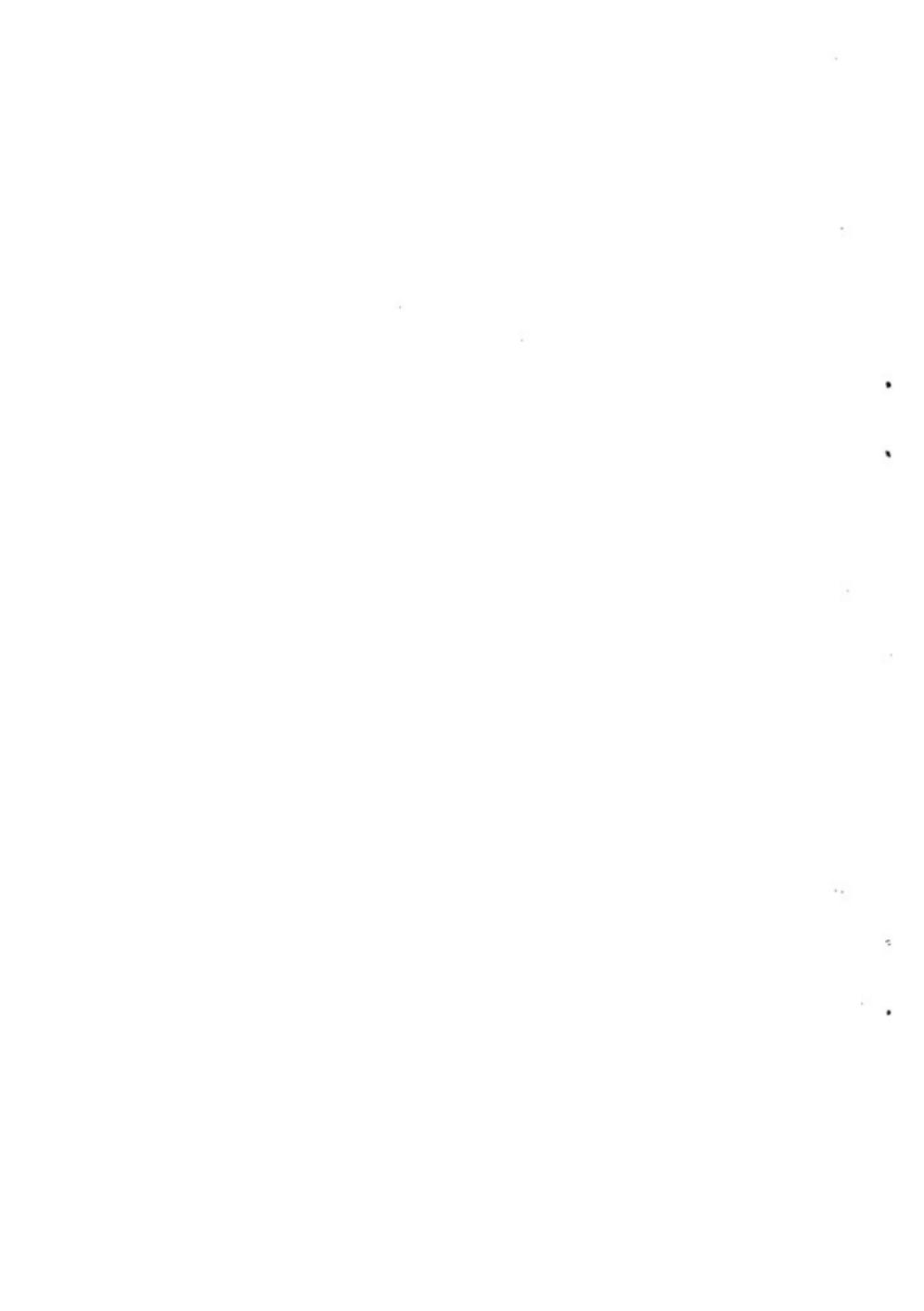
当委員会では、今後も文化財の保護と活用のため、努力する所存でありますので、市民各位の御協力をお願いいたします。本書が各位の郷土に対する認識と理解の資料として、御利用いただきますなら幸甚であります。

本遺跡を調査いただいた九州大学考古学研究室および関係各位に対して、深甚の謝意を表します。

昭和46年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 豊 島 延 治



## 目 次

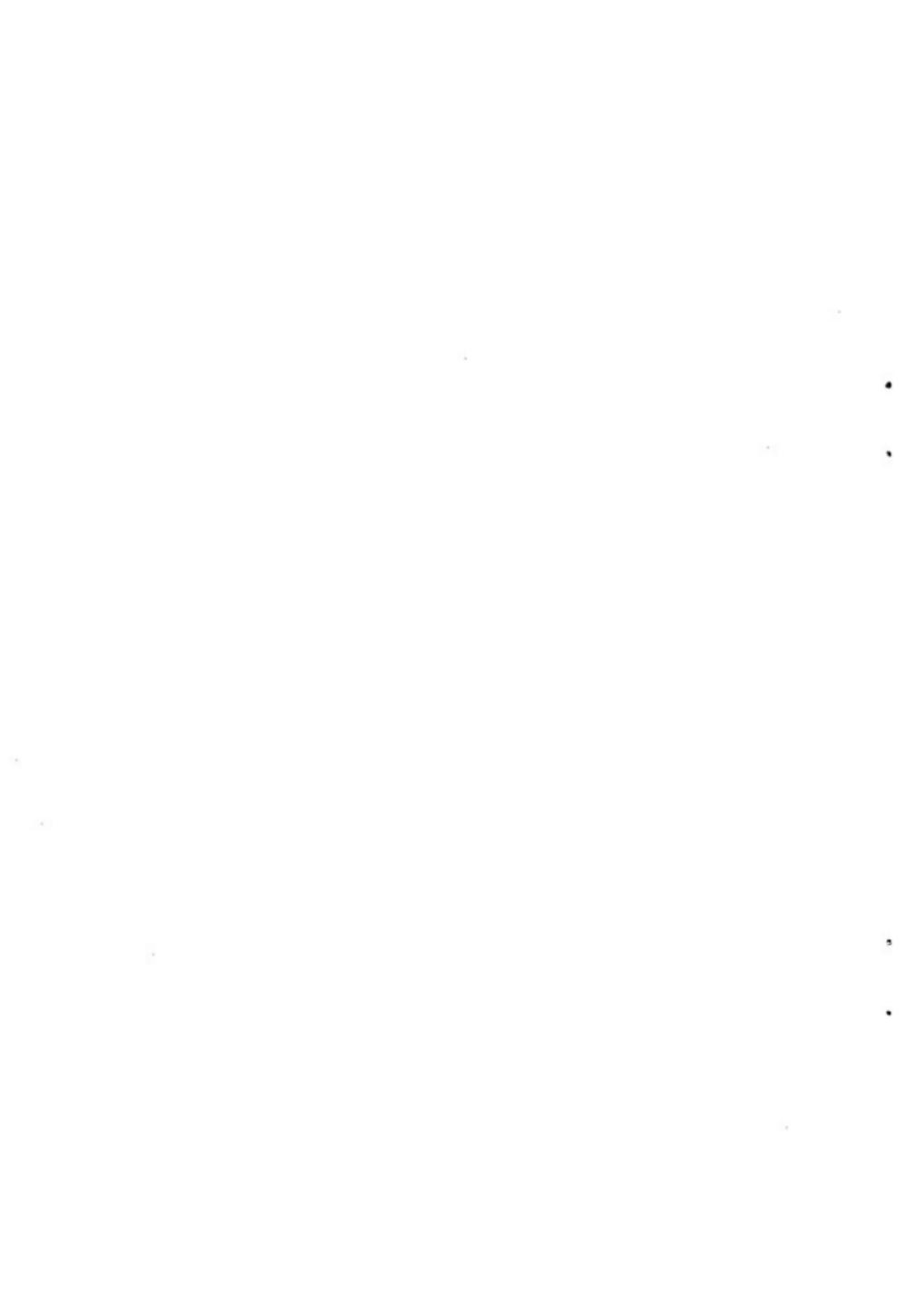
第Ⅰ章	序 説	1
(1)	調査にいたる経過	1
(2)	調査の経過	1
第Ⅱ章	調査の記録	5
(1)	はじめに	5
(2)	1・2号住居址	7
(3)	3号住居址	14
(4)	その他の調査	16
第Ⅲ章	結 び	22
付録	半球形有孔滑石製品について	24
追補		29

## 図版目次

図版1	(上) F地点遠景(南側より) .....	橋口達也撮影
	(下) F地点遠景(北側より) .....	高倉洋彰撮影
図版2	F地点1・2・3号住居址全景 .....	橋口撮影
図版3	(上) F地点1・2号住居址 .....	"
	(下) F地点3号住居址 .....	"
図版4	(上右) 滑石製石錘の出土状態(F地点2号住居址) .....	"
	(上左) 滑石製石錘の出土状態(F地点2号住居址) .....	高倉撮影
	(下) 器台の出土状態(F地点2号住居址) .....	"
図版5	(上) 半球形有孔滑石製品の出土状態(F地点2号住居址) .....	橋口撮影
	(下) 器台と半球形有孔滑石製品の出土状態(F地点2号住居址) .....	"
図版6	(上) 小形丸底壺の出土状態(F地点3号住居址) .....	"
	(下) 高坏の出土状態(F地点3号住居址) .....	高倉撮影
図版7	(上左) 鉄ノミの出土状態 .....	橋口撮影
	(上右) 他の出土状態 .....	"
	(下) 鋤先の出土状態 .....	高倉撮影
図版8	(上) 二重口縁壺(F地点2号住居址) .....	林崎伸男、橋口撮影
	(下) 小形丸底壺(F地点3号住居址) .....	"
図版9	(1) 鉄器(F地点1号住居址) .....	"
	(2) 石錘(F地点2号住居址) .....	"
	(3) 石錘(F地点2号住居址) .....	"
	(4) 半球形有孔滑石製品(F地点2号住居址) .....	"
図版10	F地点出土の鉄器、鉄滓	
	(1) 鋤先(F地点) .....	"
	(2) 施( ) .....	"
	(3) ノミ( ) .....	"
	(4) 炉壁の附着した鉄滓( ) .....	"
	(5) 鉄滓( ) .....	"
図版11	半球形有孔滑石製品	
	(1)、(2) 福岡市姪之浜 .....	"
	(3) 福岡県前原町潤 .....	"
	(4) 福岡市大洞(博多駅) .....	高倉撮影
	(5) 聖福寺藏 .....	鏡山猛撮影

## 挿 図 目 次

第1図	宮の前遺跡地形図.....	(福岡県労働者住宅生活協同組合原図 調査団補正、岩崎二郎製図) .....	6
第2図	F地点遺構図.....	(岩崎・武末純一実測、藤口健二製図) .....	7
第3図	1・2号住居址実測図.....	(武末・高倉実測、武末製図) .....	8
第4図	1・2号住居址出土土器実測図.....	(橋口・岩崎・武末・高倉実測・高倉製図) .....	10
第5図	1・2号住居址出土鉄器・石器実測図.....	(橋口実測、製図) .....	12
第6図	3号住居址実測図.....	(藤口・岩崎実測、岩崎製図) .....	13
第7図	3号住居址出土遺物実測図.....	(橋口・藤口・岩崎実測、藤口製図) .....	15
第8図	F地点出土土器実測図.....	(橋口・藤口・岩崎実測、橋口製図) .....	17
第9図	F地点出土鉄器・石器実測図.....	(橋口実測、製図) .....	18
第10図	半球形有孔滑石製品実測図.....	(橋口・高倉・武末実測、橋口製図) .....	26
第11図	福岡市犬飼(現博多駅)出土土器実測図(橋口実測、製図) .....	28	
第12図	" "	( " ) .....	30



# 第Ⅰ章 序 説

## (1) 調査にいたる経過

土地所有者川嶋正実氏から宅地造成の申請があったので、田坂・三島が事前に現地を踏査した。申請地域は前記福岡県文化課、同市文化課により、かなり広域の発掘調査を実施した地域に隣接し、かつ熊野神社境内および周辺の美林に接する地点であり、特に後者にとってその自然環境をそこねるのではないかという、懸念があったが、同社とは小丘をもってへだてられており面積もせまいことは幸であった。なお、当初、熊野南遺跡としていたが前記福岡市文化課の発掘地がA-D地点、同県文化課がE地点であったので、本発掘地をF地点と命名し、7月10日から同24日まで発掘を実施した。

調査にあたっては所有者川嶋正実氏および宿舎を提供された柴田六郎氏から、多くの御高配を得た。明記して感謝の意を表す。

(三島格)

## (2) 調査の経過

発掘調査は昭和45年7月10日から7月24日までの15日間にわたって実施された。調査にあたって、フィールド・ワークは九州大学考古学研究室の大学院生・学部学生5名によって行なったが、指導員の諸先生には現地あるいは研究室において適切な御指導と有益な御助言をいただくことができた。調査団の構成は次のとおりである。

調査指導員 九州大学文学部考古学研究室・教授 銚山 猛(調査団長)

\* 助教授 岡崎 敏

\* 講師 森 貞次郎

\* 助手 小田富士雄

九州大学医学部解剖学第二講座・教授 永井 昌文

調査員 九州大学大学院院生 橋口 達也(調査主任)

\* 高倉 洋彰

九州大学文学部考古学研究室学生 藤口 健二

\* 岩崎 二郎

\* 武末 純一

福岡市教育委員会 豊島 延治 大藏 富繁 青木 崇

三島 格 清水 義彦 石橋 博

岩下 拓二 野上 淳次 三宅 安吉

山 口 俊 二 下 条 信 行 柳 田 純 孝  
塙 屋 勝 利 田 坂 美 代 子 折 尾 学  
徳 永 照 代

なお、発掘にあたっては、長澤一先生をはじめとする県立福岡高校考古学部の生徒諸氏の御協力を受けることができた。

7月9日（木） 晴 明日からの発掘に備え、前準備を行なう。午後、九州大学より器材を搬入し、点検する。地元との打合せを終えたのち、現場を見学する。調査区の設定を予定していたが、伐採の必要があり、翌日に延期した。

7月10日（金） 晴 本日より作業開始。全調査区域（南北30m×東西36m）を南北5m・東西4m毎の小グリッドに区画し、南からA…F、西から1…9と符号を付した。日数からみて全域の調査が可能であると判断し、伐採に併行して西側から表土の全面排除を開始。樹根に災いされ、予想外に仕事がかかる。C-1区より土器を含む小ピットを検出。

7月11日（土） 晴 午前中で伐採をほぼ終了。表土直下に地山があらわれたため、地山面の検出をいそぐ。遺跡の遠景を撮影。

7月12日（日） 晴 休

7月13日（月） 曇時々晴 地山面の検出を続行。不明瞭ながら3個の竪穴があらわれ、西から1号、2号、3号と仮称することにした。仮1号竪穴から大形の不明鉄器（鎌？）や弥生時代終末期に属する土器を検出。仮3号竪穴からは鉄滓が出土。発掘作業に併行して地形測量を行なう。

7月14日（火） 晴時々曇 遺構の検出をすすめたが、新たな知見を得ることはできなかった。

7月15日（水） 晴時々雨 丘陵頂部の平坦面は県・市教育委員会によってすでに調査を受け、今回の調査地点はその西側の一部に頂部平坦面がかかるものの大半はその東斜面に相当



発掘の風景

している。過去の調査の結果から、住居が平坦面に営なまれていることは十分に想定され、実際、傾斜面にはほとんど遺構を認めるることはできない。このような事情から、調査員は遺構の検出に集中し、傾斜面の表土剥ぎは作業員にまかせることにした。

7月16日(木) 晴一時雨 午前中集中的な豪雨に見舞われ、作業はかどらず、表土の掛けはかなり進んだが、明瞭な遺構を見い出すことはできない。

7月17日(金) 曇 連日にわたった表土剥ぎ作業をほぼ完了。露出した地山面を清掃し、明確な遺構の検出にあたった。その結果、調査区西側の傾斜面に遺構を認めるることはできなかっさ。仮1号～仮3号と仮称している竪穴にしても遺構の輪郭に不明瞭な部分があり、全体を把握するにはいたらない。C-7区の鷹権土中より鉄製鋤先、D-9区より砥石(?)出土。

7月18日(土) 晴一時雨 C-9区の表土剥ぎ作業中、腐植土中より刃部を下にして直立した状態で鉄ノミが出土。仮1号～仮3号各遺構は掘込みの線が不明瞭で、まだ全体を把握するにいたらない。掘込みの明らかな部分から発掘を始める。仮1号竪穴にはベッド状遺構を伴うらしい。仮3号竪穴の南外より注口土器の注口部出土。この数日、集中的に豪雨に見舞われ、作業の進行状況は良くない。

7月19日(日) 晴 作業の進行が遅れているため調査員一同休日を返上して調査を続行。午前中仮1号～仮3号竪穴の輪郭を追求し、午後は仮1号竪穴に集中。仮2号竪穴西北隅の外側約12mのところから鉄鉗を検出。仮1号竪穴からはいわゆる西新町式土器をかなり検出することができた。本日は沢皇臣氏に発掘の御協力を受けることができた。遅延した作業の中での御援助、感謝すること大。

7月20日(月) 晴 仮1号と仮称していた竪穴が2軒の住居址の複合であることが判明。床面の浅い竪穴を仮1-①号、深い竪穴を仮1-②号と便宜上区別したが、先後関係は不明。②号竪穴から石錘・半球形有孔滑石製品が床面に密着して出土。なお、13日出土の鉄器(鎌?)は①号に属する。仮2・3号竪穴は二個の竪穴の複合にみえるが、方向・床のレベルがほぼ一致し、同一竪穴となる可能性がでてきた。

7月21日(火) 晴 仮1-①・②号の調査を続行。床面・壁の一部を確認。仮3号竪穴には東壁にそってベッド状遺構が付設されている。仮3号のピット中より小形丸底壺を検出。本日より県立福岡高校考古学部の生徒諸氏参加。岡崎・森尚指導員来訪。

7月22日(水) 晴 土器の水平分布の状態などから仮1-②号が仮1-①号に先行することが明らかとなった。遺構の検出はほぼ完了したが、仮1-②号の東壁・北壁を明らかにするにはいたらない。仮2・仮3号の中央部に十字に設けていたバンドを取り扱い両者の関係を追求することにし、床面検出作業と併行して行なう。

7月23日(木) 晴 バンド除去作業を続行し、仮2・仮3号としていた竪穴が同一のものであることを確認。この結果、仮1-①号をF-1号住居址、仮1-②号をF-2号住居址、仮2・3号をF-3号住居址、とそれぞれ命名。遺構の発掘はほぼ完了。調査区域内を清掃し、写真撮影を行なう。

7月24日（金） 晴 実測に着手。F-2号住居址の一部の実測を残してすべての作業を終了。新たにF-2号住居址の南西隅より石錐出土。本日で調査を終了し、一応調査団を解散。

7月25日（土） 晴 F-2号住居址の実測を完了。昨日に引き続き撤収作業を行ない、昼前に九州大学に帰着。すべての調査日程を大過なく完了することができた。

調査にあたって、土地所有者川嶋正実氏、薄汚れた我々に心良く宿舎を提供していただいた柴田六郎氏御一家、我々の、ともすれば無理に成り勝ちな要求を受け入れて炎天下にもかかわらず黙々として発掘作業に従事していただいた地元の方々、そのほか多数の人々の暖かい御協力によって調査を無事終えることができた。心から感謝の意を表したい。

(高倉洋彰)

## 第II章 調査の記録

### (1) はじめに

福岡市拾六町熊野神社周辺の遺跡は、1968年春の九州大学考古学研究室による有田遺跡発掘調査の際に弥生時代終末期に属する土器の包含層が確認され、以来注目されるところとなつた。1969年8月、今宿バイパス路線決定のため、同包含層および丘陵頂部に福岡県教育委員会によって調査の手が加えられ、弥生時代終末期の住居遺構などが発掘された。<sup>①</sup>その後、同地点の西側部分に隣接して福岡県労働者住宅生活協同組合が宅地の造成を計画し、1969年12月から1970年1月にかけて福岡市教育委員会によって調査が行なわれ、終末期の住居遺構や同時期の墳墓などが発掘され、その重要性が再確認された。<sup>②</sup>市の調査区は丘陵毎にそれぞれA～D地点と命名され、B、C、D地点を実際に調査した。県調査区は市のD地点と同一丘陵で、隣接するが、便宜上E地点とした。

九州大学考古学研究室が福岡市教育委員会より調査を委嘱された地点は福岡県教育委員会の調査区（宮の前E地点）の東側に隣接し、この丘陵頂部の平坦面の東側、ゆるやかに傾斜する部分にあたる。この地点は当初福岡市教育委員会によって熊野南遺跡と称されていたが、上述のようなこれまでの調査の経過から宮の前F地点と呼称することにした（第1図）。

F地点の調査は、南北を5m、東西を4mごとに区画し、それぞれA～F、1～9のグリッド番号を付した後、全面の表土を剥ぎ、遺構を検出することに努めた。しかし、地形の要素から遺構の存在を考えることのできない南北両急傾斜面の調査は行なわず、実際にはB-1～7区、C-1～9区、D-1～9区の全面、B-8、E-1～3、E-7、F-7の一部を発掘調査した。南・北の急傾斜面の調査は福岡県教育委員会の調査の際に実施され、北側斜面の流れ込みの状態が確認されており、プライマリーな状態はのぞめなかった。

F地点の遺構はこの東西にのびる丘陵の頂部平坦面の東北端に計3軒の住居址を確認できたが、その他にはC-1～D-1区にかけて新しい時代の掘り込み、C-8～D-8区にかけて性格不明の小ピットなどが検出されたにすぎない。この部分は第1図に示されるように東側への傾斜面にあたり、出土の土器・鉄器・石器はそのほとんどが流れ込みの状態であった。

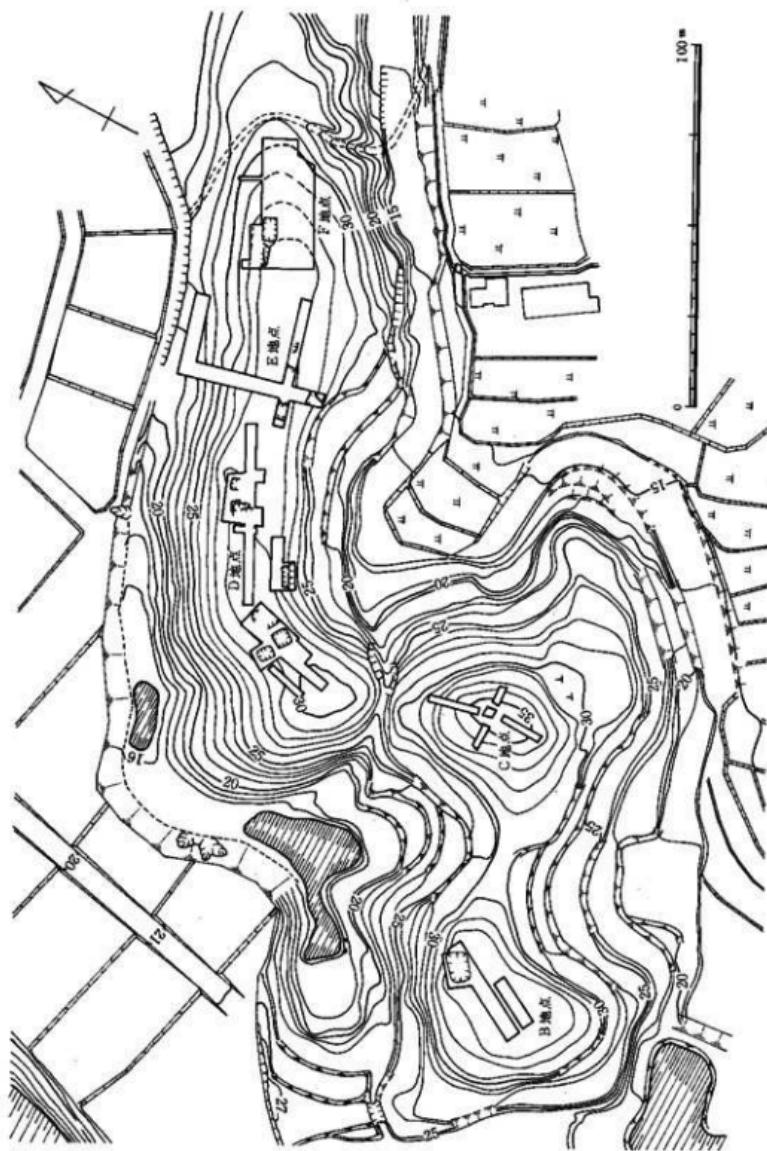
また、この丘陵は本来松林であり、事前に伐採されてはいたものの、その切株はそのまま残され発掘は困難をきわめた。さらに、松の根によって大きく擾乱をうけ、遺構の損壊もはなはだしく、全体の把握に必要以上の時間を要する原因となつた。

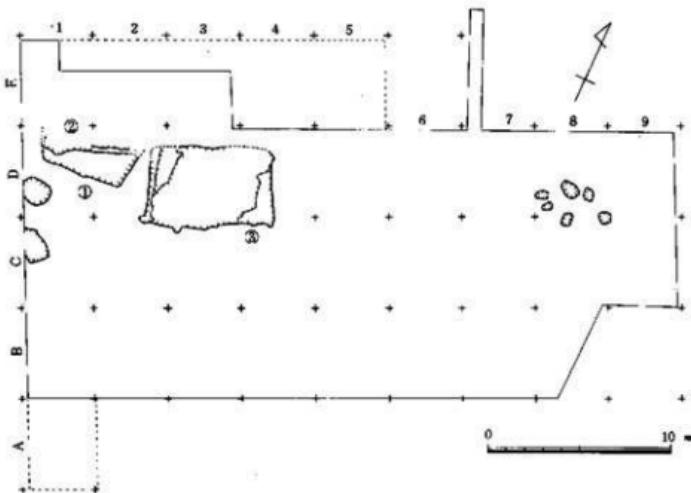
本報告では「宮の前遺跡の立地と環境」を近刊予定のB、C、D地区報告書に譲り割愛しているので、同書を参照していただきたい。(橋口達也・高倉洋彰)

① 酒井仁夫『宮の前遺跡E地点』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告1、1970

② 報告書近刊

第1図 宮の前遺跡地形図



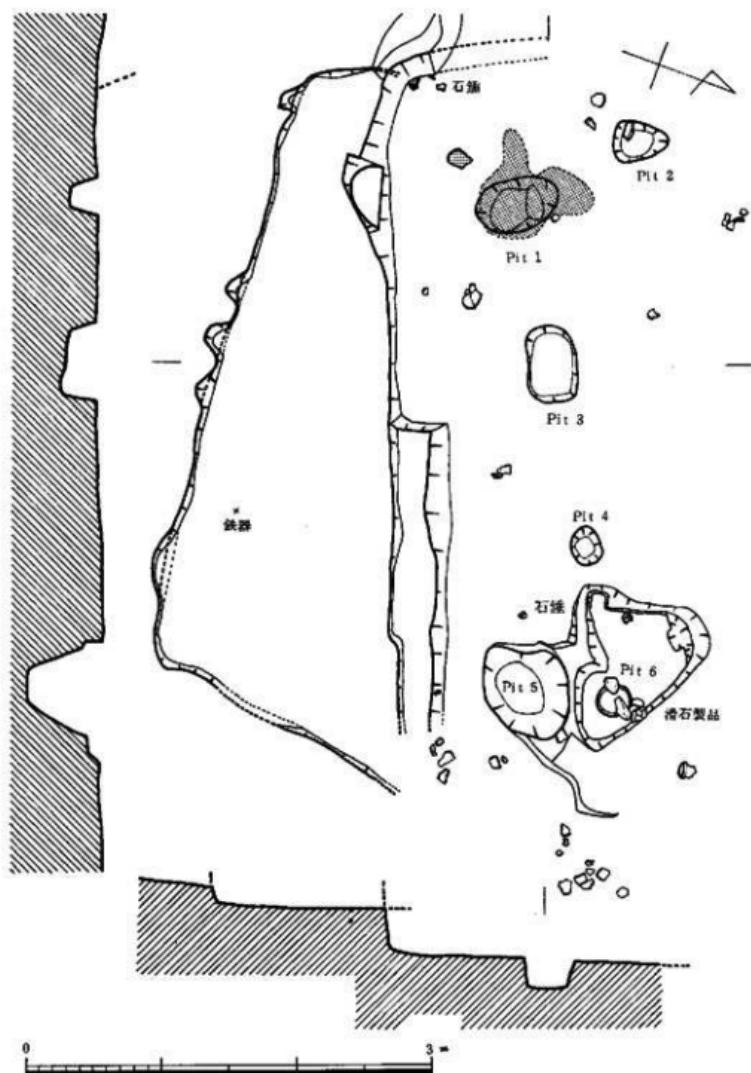


第2図 F地点遺構図

## (2) 1・2号住居址

**【住居址】**（第3図）1・2号住居址は宮の前F地点頂部平坦地の東端から北側の斜面にかけて位置し、相互に切り合いの関係にある。北側斜面の傾斜が急なために両住居址とともにその半分は失われており、明確なプランの復元は困難である。1・2号住居址の先後関係は、相互の切り合い関係から把握される。すなわち、2号住居址覆土中出土の遺物のなかに、1号住居址の床面と同一のレベルに位置するものが多くあることから、2号→1号の順序であると考えてよい。

**1号住居址** 1号住居址は、南壁及び東壁の南半分が残存し、南北は4.5mをはかる。西・北壁が失われているため全体のはっきりした復元はできないが、長方形プランの住居址であることを窺わせる。主軸線は東西方向にとるものと考えられ、壁の現存高は12cmをはかる。1号住居址に付属するはっきりした柱穴は確認することができなかった。南東隅付近より鉄器が出土した。



第3図 1・2号住居址実測図

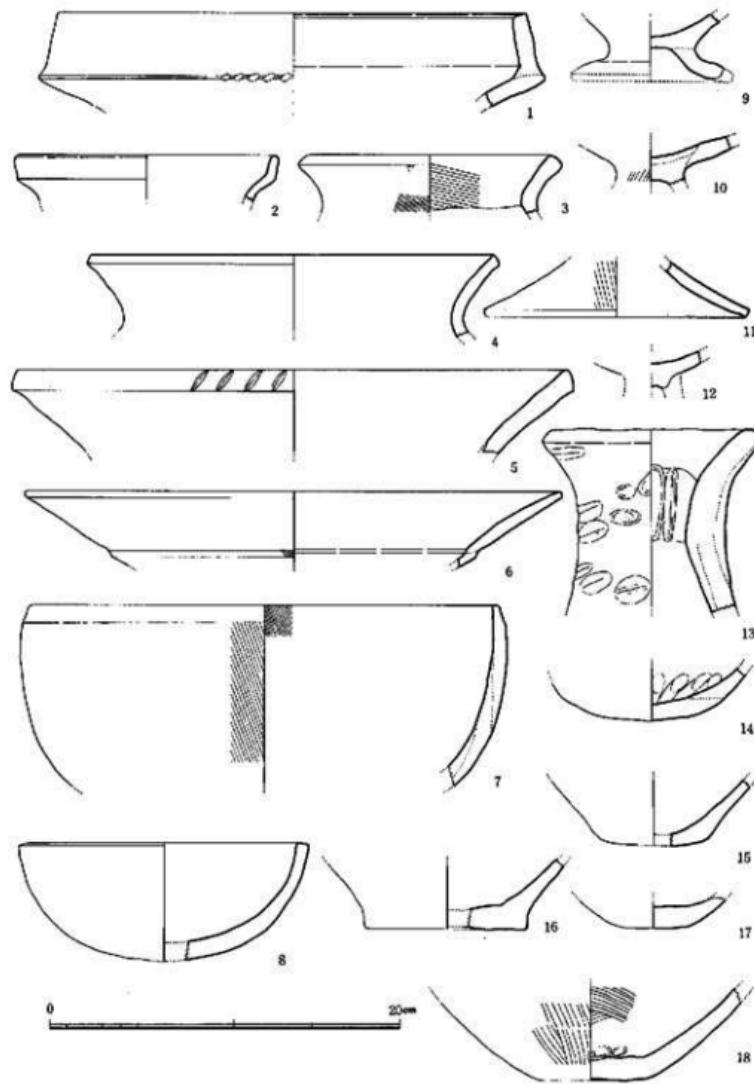
**2号住居址** 2号住居址は南西隅に続く南壁を残存するのみであるが、主軸の方向を N70°E にそる長方形プランの住居址であると推定される。南壁東半分の内側に幅20~30cmの段を有する。住居址東側にかなり深い掘り方があるが、樹根による擾乱がひどく、住居址との関係は明らかにできなかった。掘り方の内部には小ピットがあり、ピットの埋没後に設けられたと考えられる石のまとまりが認められた。この部分も擾乱を受けており、2号住居址との関係は明らかでないが、同時期の所産である可能性が強く、少なくとも1号住居址に先行する。この住居址にはP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>が付属すると考えられる柱穴として考えられるのはP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>であり、P<sub>1</sub>の上部全面に焼土がかかっていたところから、最初はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>を使用し、なんらかの事情でP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>に変更したものであろう。P<sub>3</sub>は柱穴としては不適当な位置にあり、性格は不明である。P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>の2つの柱穴を予想りとして、2号住居址のおよそのプランを復元することができる。P<sub>1</sub>は西壁南壁からそれぞれ約1mのところにある。P<sub>3</sub>は深さを除いてP<sub>1</sub>と同様の形態・規模をもち、南壁から約0.9mのところにある。両ピットと他の4つのピットとは共通要素が少なく、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>を、2号住居址の4本の主柱のうちの2つの柱穴とみることができる。したがって2号住居址の東壁は、P<sub>3</sub>の東約1mの部分に想定できる。両ピットの間隔は約3.6mあり、このことから2号住居址東西の長さは約5.6m程度と考えられる。このことは、住居址内からまんべんなく出土する土器片が、東西両壁の推定線の外側には出土していないことからも例証される。また南北方向は、住居が傾斜面にかかるため、主軸同様或いはそれ以上の長さを有することは考えられず、P<sub>1</sub>と南壁との間隔と、P<sub>1</sub>より北へ確認することのできた床面の長さ約0.8mとから、その長さの倍約3.6mを多少上回る程度の長さを有したものであろう。したがって、5.6m×40t/m程度の長方形プランの住居址を復元することができる。遺物は土器の他に、石錐2個、半球形有孔滑石製品1個が出土し、焼土は前述の他二ヶ所に認められた。

(武木純一・高倉洋彰)

#### 〔出土遺物〕 出土遺物には土器・石器・鉄器がある。

**土器（第4図）** 1・2号住居址に伴う土器は全て破片ばかりで完形をとどめるものはない。その種別を示せば壺・甌・鉢・高环・器台となる。1号住居址に伴う土器は2、5、7であり、2号住居址には1、3、4、8、9、10、11、13、14、18が伴う。6、12、15、16、17は覆土中から出土し、いずれの住居址に伴うかは不明である。

2は二重口縁壺の口頭部である。頭部より外反し、脣曲部からやや外開きとなって立ち上がり、二重口縁をなす。口縁径15cmをはかる。外面とも横になでて調整している。色調は褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。5は甌の口縁部であるが、口縁径31.2cmをはかる。頭部より大きく外反し、口唇部上面にはいっぽいに刻目文を入れている。外面は横方向にみがいでいる。色調は赤褐色を呈し、胎土に大粒の砂粒を含む。7は鉢形土器で下部を欠くが、胴部からゆるやかに内反し、口縁直下でわずかに稜がつく。口縁径26.8cmをはかる。口縁部内面は縦方向に細い刷毛で調整し、外面は横になで、胴部外面は粗い櫛で整形している。



第4図 1・2号住居址出土土器実測図

1は所謂西新式二重口縁臺で、口縁径26.8cmをはかる。口唇部上面は少しくぼみ、屈曲部以下は口縁部に比して器壁が薄い。口縁端より屈曲部まで内外面とも指で横になでて調整し、その後で屈曲部に刻目を入れている。色調は黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが、焼成は堅緻である。3・4は裏の口縁部である。3は口縁径14cmをはかり、口縁端がわずかに肥厚する。内面は横方向の刷毛を用い、頸部はけずって整形している。外面は縦方向の刷毛で調整したのち、口縁部は横になでている。色調は淡褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。4は頸部があまりひきしまらず口縁部につづき、口唇部内面をわずかにつまみあげている。色調は黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。9・10は脚付鉢である。9は脚が大きく広がり裾端部で少し肥厚している。色調は黄褐色を呈し胎土に砂粒を含む。10は接合法よりみると高坏の可能性もある。坏部と脚部の接合部外面を縦方向に刷毛で整形している。色調は黄褐色を呈し、胎土に大粒の砂粒を含む。8は鉢形土器である。厚い器壁をもち、半球状を呈する。口縁部はわずかに肥厚し、縁が明確につく。口縁径15.4cmをはかる。色調は暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。11は高坏脚端部であり内面をけずりだして段をつくる。外面は粗い刷毛で調整している。脚端径14.6cmをはかる。色調は赤褐色を呈し、胎土は精選され焼成も堅緻である。13は器台の上半部であるが、復元高20cm前後と考えられる。外面は階円形の大きなタタキを施し、次に指でおさえて整形し、内面は一部指で縦方向になでている。色調は乳白色がかった黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。14・18は底部である。14は丸底に近く、内面は指で接合部をおさえつけて、そのまま手前にひいている。18は底径6cmの平底を示し、外面は底面まで櫛で整形している。内面には底部を接合した際のおさえた痕があり、斜方向に刷毛で整形している。色調は黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

6は高坏の坏部で、口縁径30.8cmをはかる。段を有し、大きく外に開き、接合部は斜めに刷毛で調整し、口縁直下は横になでている。色調は淡褐色を呈し、胎土は精選され、焼成は堅緻である。12は高坏の坏接合部であり、赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。15・16・17は底部である。15は殆んど丸底に近く、色調は褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。16は完全な平底を呈し、底部径9.3cmをはかる。これは他の土器と比して時代が上のものと思われる。色調はピンクに近い赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。17は底部径3.8cmの丸底に近い平底である。色調は褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

住居址の項で考察した1・2号住居址の先後関係は1・2の二重口縁臺によっても例証される。1・2号住居址の土器は殆んどが弥生終末期に位置し、第4図2の二重口縁も土器的様相をもつが、他の上器よりみれば、やはり弥生終末期に属すると考えられる。（武末純一）

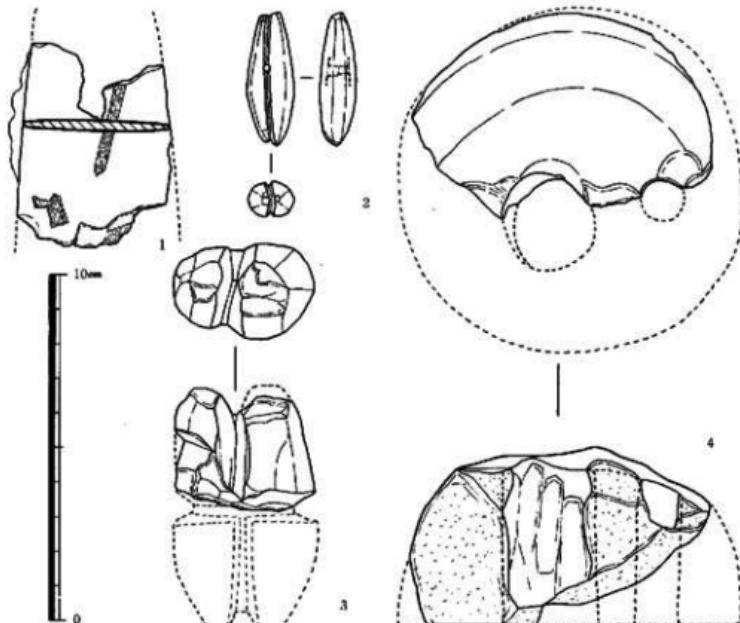
鐵器（第5図-1） 1号住居址の南東隅附近より出土したものである。小破片なので全体の形を推察しがたいが、最小幅3.8cm、最大幅4.6cm（復原値）を計るので、剣ないし、鎌を想定できる。断面は厚さ3mmで両側にいくにしたがって微かに薄くなるが刃はついていない。したがって剣を想定することは困難であろう。鎌とすれば長10cmをこえる大形品になると思われるるので、若干躊躇するが、10cm程度の鎌も存在するので、鎌になる可能性が強いと思われる。

木質の附着が方向を異にして認められるが、これは松の根に密着した状態で出土したので、松の根の木質が附着したものであろう。

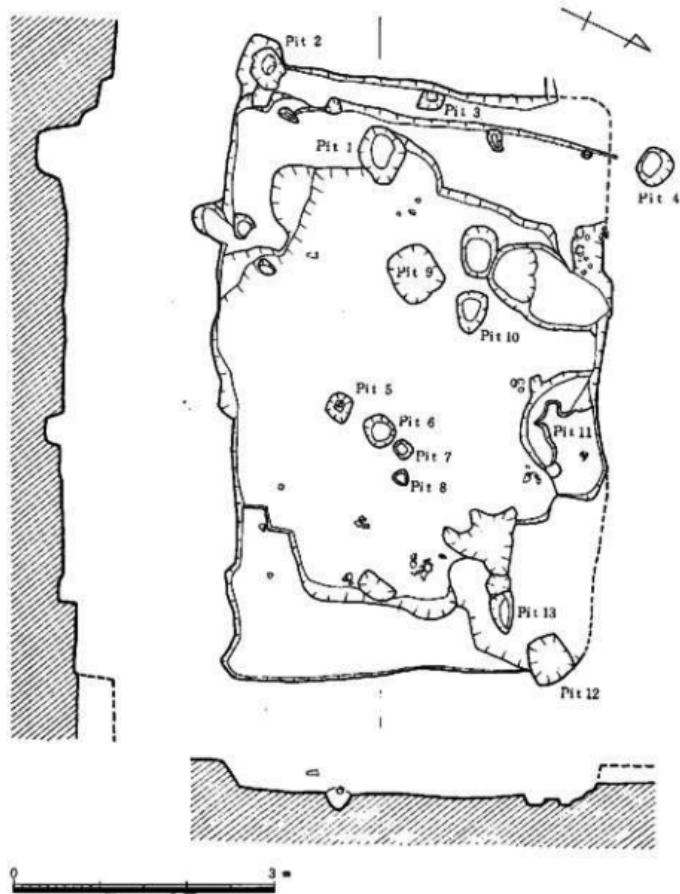
石器 石器は石錐2、半球形有孔滑石製品1の出土がある。

石錐（第5図-2・3）はともに2号住居址の床面よりの出土である。2は $3.9 \times 1.35 \times 1.1$  cm、重さ 7.5grの滑石を入念に仕上げた小形石錐である。両端に抉りを入れ、中央に幅2mm程の溝を通し、そのほか中央部に両方より窄った小孔をつくりだしている。3は大形に属する滑石製の石錐である。十字にひらかけの溝を通してあるが、丁度半分のところで折れている。復原した長さは約7cm程度、幅は4.1cm、厚さは2.3cmである。残存した部分の一側に二次的な抉りをつくり再使用したものである。この石錐の重量は60grであり、本来はほぼその二倍の重さのものであったことはいうまでもない。

半球形有孔滑石製品（第5図-4）は2号住居址より出土したものである。半分弱に破損しているが、中心部と側面の2孔が認められる。完形品は第10図に示すように、ほぼ半球形を呈し、中心部の孔と側面の小孔をもつものが一般的であるが、中心部の孔のみの例もある。普通径12cm程度、高7~9cm、重量 2,000gr程度のものが多いため、本例は径9.8cm（復原値）高5.1cmと小形のものである。この石器の使用された時期は弥生終末期頃であろうと推定されではいたが、今回の調査でそのことを確実にできたことは幸いである。  
(橋口達也)



第5図 1、2号住居址出土鉄器石器、実測図 (1……1号、2~4……2号)



第6図 3号住居址実測図

### (3) 3号住居址

【住居址】 丘陵北側斜面にかかるD-3区において検出されたこの住居址は、長辺約7m、短辺約4.5mの不整長方形を呈し、主軸はN66Eで東西に長い。

傾斜地に位置するため、北壁と南壁の残存状態は悪い。南壁の残存高は約30cm、北壁は約10cmである。西壁側面には高さ約30cm、幅約20~30cmの段がついており、段上からの壁高は約12cmである。

西壁の北半に接し約2mにわたって、幅約80cm、高さ約20cmの段がある。また東壁から南壁にかけても、L字状の幅約90cm、高さ約16cmの段がある。この二つの段は、その上面のレベルの差が5cm以内におさまることは一定しており、ともに非常に不整な形を示しているが、この遺跡はかなり後世の搅乱を受けているので、ベッド状造構と考えてもよいと思われる。東壁の段上での壁高は約4cmある。

柱穴は四隅にあったと考えられ、Pit 2・4・12がそれにあたる。東南隅は木の根があって柱穴の検出はできなかった。Pitは、残存する深さは約20cmしかないが、斜面にかかるところに位置するので本来もっと深かったと考えられ、柱穴としてよいと思われる。

床面の保存は悪く平坦でない。炉址や焼土も検出されなかった。

出土遺物は石製品一点、鉄滓2点と土器である。土器は全面にわたって出土したが、壁に近い部分での出土が比較的多い。

(岩崎二郎)

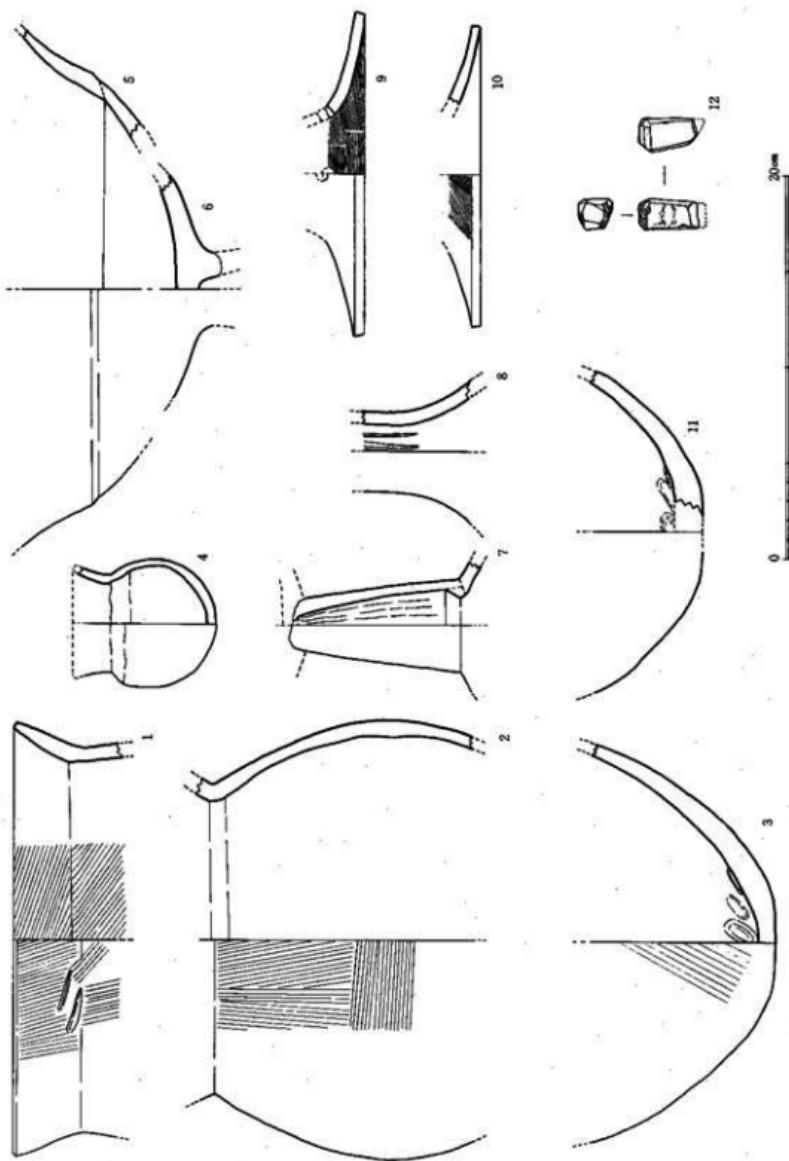
【出土遺物】(第7図) 遺物には土器(1~11)と石器(12)がある。3号住居址の全体を把握する以前の出土品(9)も一括してとり扱うこととする。なお発掘開始直後、本住居址が存在するD-3区から小鉄滓2点が出土しているが、表土層出土でその時期は不明である。器種は壺、甕、高杯、小壺の四種があるが、発見個体数は少なく、かつ破片が多い。従って本住居址における生活に使用した土器の様相は知りえない。確実に床面に付着していた土器は3・6・13である。

壺には2・3・11がある。2は外面にハケ目を有し一部分黒変している。胎上に砂粒が多く、内面の剥落は著しい。3・11はほぼ丸底である。3は外面に巾広く細いハケ目を有し、11は底部近くをヘラ状のもので削っている。ともに赤褐色を呈して脆く底部内面を指で押えて整形している。

甕(1)は口径22.5cmで、短く立ち上がった口縁の外外面にはハケ目を有する。頸部外面にはその接合部を棒状の器具で押えた痕がある。体部は張り出ことなく、丸底に近い底部につづくものと考える。弥生式土器終末期に相当する時期であろう。

高杯(5・6・7・8・9・10) 5は復元口径28.4cmのやや大形の壺部で胎土に砂粒を多く含み焼成軟弱で黄褐色を呈す。接合部にはわずかに段を有し身は深い。6は床面に付着していた。焼成不良で黄褐色を呈す。恐らく9の形態の脚部が付こう。7の脚筒状部はややふくらみ、縁を有して低く広がる壺部が粘土紐により接合されている。内面にはシボリの痕がみら

第7圖 3号住居址土出遺物実測図



れる。床面から15cm程浮いて発見された。時期は有田I式に相当し、流れ込みと考えられる。8は内面にシボリの痕を有する。9は住居址の全体を把握する以前の出土で、胎土は良好であるが焼成は軟弱で赤褐色を呈する。内面は細いハケで整形され透孔を有する。恐らく三孔になろう。7の時期が下降するほか以上の高环は終末期に相当しよう。

小壺(4)は口縁端をわずかに欠損しているが復元される口径、器高は各々5.9cm、7.4cmである。球状の体部にあまり外反しない短い口頭部が接合され、その部分には胎土のはみだしが整形されないまま残っている。この小壺はPit5より出土したが、その底部のレベルは床面とはほぼ同じである。しかしPit5の底部からは16cmの高さに位置していた。大粒の砂粘を含み焼成はあまり良くない。形態や発見位置からして本住居址出土品と同時期の終末期と考えられる。

石器(12)は3とともに発見され現存長3.1cmで石材は頁岩質砂岩である。方柱のノミ状石器の形態を有する。しかし側面図に示された部分は他の面とは異なり縱方向に磨った痕跡を有しかつ平坦であり砥石と考えられる。福岡県教育委員会の調査によるE地点E-L-49グリッド出土遺物中に、前期の石斧を砥石として再利用している例がある。<sup>②</sup>従ってこの例と同様に12も砥石として使用したと考えられる。

以上の出土遺物は一点の高環(7)を除き全て弥生式土器の終末期に比定され、本住居址の時期も決定されよう。

(藤口健二)

註 ①九州大学考古学研究室編「有田遺跡」 福岡市教育委員会 1968

②福岡県教育委員会「今宿バイパス周辺埋蔵文化財調査報告」第1集 1970

#### (4) その他の調査

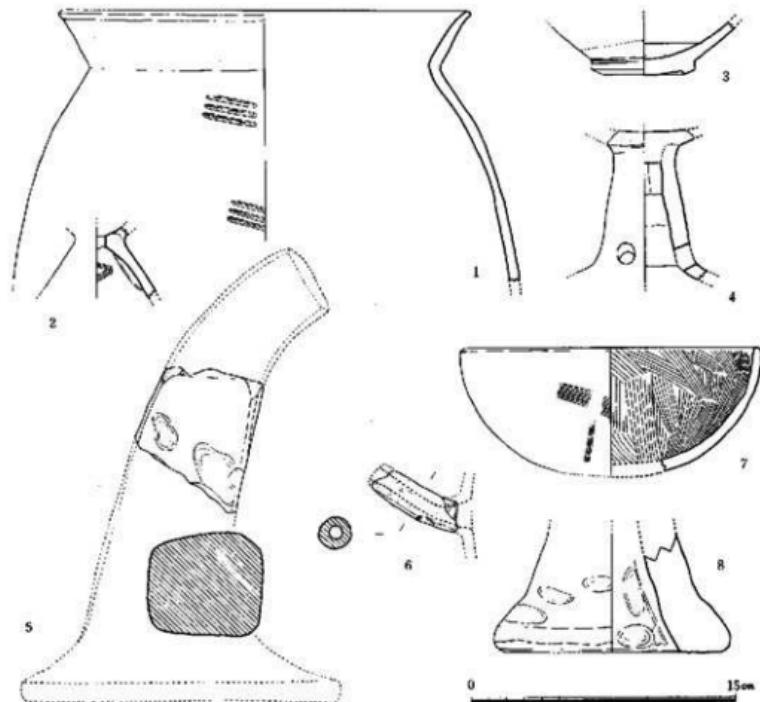
##### 【F地点出土の土器】(第8図)

1はC-1区より出土した、口縁径23cmの大形の壺である。器壁は薄く胎土には多くの砂粒をふくみ焼成も悪く、内外面ともに表面の剥落が著しい。色は褐色を呈している。口縁部は内外ともに横になでて調整し、脚部外面は叩き整形をほどこした後になでて調整しているが叩きのあとは部分的に残っている。脚部内面は指で押えて調整している。全体の形は卵形を呈する丸底に近い底部をもつものと思われる。

2はB-4区より出土したものである。この種の器台は福岡市雜飼隈出土の土器に類似がある。口縁部、脚部末端を欠失しているが、復原高は8cm程度、雜飼隈出土の完形品とはほぼ同じ大きさのものである。色は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含み焼成はあまりよくない。

脚部内面は指で押えて整形しているが部分的には細いハケも認められる。

3はD-7区表層より出土した青磁である。この青磁の釉は図に点線で示している線より上部にかけられており、うすい青鼠色を呈する。内面は底部ちかくでわずかな段を二段つくる。これらの特徴から、この青磁は三角状にはりだす口縁部を有する宋代の日常用器としての壺の



第8図 F地点出土上器実測図

特徴と一致する。1970年度に福岡市教育委員会が行った、福岡市下和白の調査の際にこの種の青磁が多く出土していた。又この種の青磁の分布は筑後地方に多いということである。

④ 4はD-7区表層より出土した高環である。坏部、脚部末端を欠失しているが、弥生終末期の特徴をもつものである。器壁は厚く、胎上には精製された粘土を使用し、焼成も堅緻である。色はあかみをおびた褐色を呈している。脚の裾部に近い部分に透孔を3個埋っている。脚部内面はヘラで整彫されている。

5はD-6区より出土した支脚の破片である。この支脚の完形品は筑後市狐塚に類例がある。<sup>⑤</sup>色は赤褐色を呈し、胎土には砂粒や大粒の石英粒を多くふくみ、焼成は悪い。表面の調整は指でおさえている。

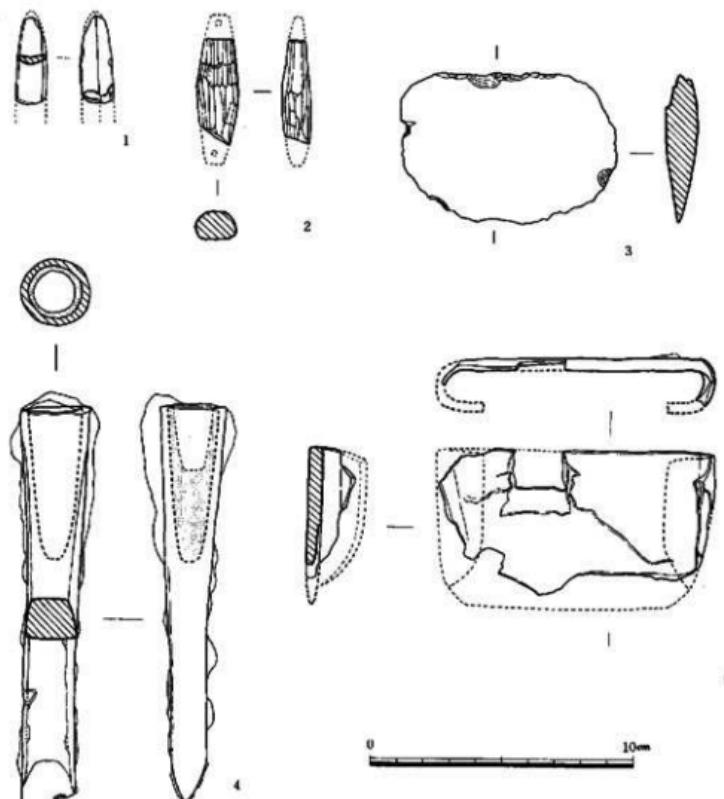
6は3号住居址南附近より出土した注口土器の注口部である。これだけで全体の形を推察するのは困難であるが、福岡県教育委員会、福岡教育大が1968年夏に行った三井郡小郡町津古の調査において弥生終末期に属する注口土器が出土している。<sup>⑥</sup>津古出土例はこの注口と比較して短小なものである。この注口部は胎土に細粒の砂をふくみ焼成は悪く、色はうすい茶色を呈し

ている。

7はD-1区表層より出土した鉢である。底部を欠失するが全体の形はうかがえる。径は17cm、高さ7cm強である。胎土には砂粒が多く、焼成はあまりよくない。外部表面は剥落が著しい。色は茶褐色を呈する。内外ともにあらいハケで調整している。

8はD-6区より出土した器台である。部厚い器壁をもち、胎土に大粒の石英粒を多くふくみ、焼成は悪く、色は褐色を呈する。調整は内外ともに指で押えて行っており、全体としては粗雑さを感じさせる。

以上、F地点出土の土器を8点図示したが1・4・5・6・7・8はいずれも弥生終末期に属するものである。2は古式の土師器であり、3は宋代の青磁である。他に小破片が多数出土



第9図 F地点出土、鐵器、石器実測図

しているが特徴的なものは少く、その大部分は弥生終末期に属するものといつても大過ない。土器は第8図-2以外に検出することはできなかった。他に1片であるが須恵器が出土したが、これは時期を認定するにはあまりにも小破片であった。

(橋口達也)

- ① 筑後市教育委員会「狐塚道路」1970
- ② 小田富士雄氏の御教示による。
- ③ 筑後市教育委員会「狐塚道路」1970
- ④ 報告書未刊

#### 〔F地点出土の鉄器・石器〕(第9図)

##### 鉄器(1・4・5)

1はE-3区、3号住居址の西北隅の外側約120cmの地点より出土した鉈である。先端部3cmだけを残し、残りの部分を欠失しているが、福岡県教育委員会、市教育委員会で調査した際に出土した鉈の例から、長さは15~20cm程度になると考えられる。幅は1.4cm、断面の厚さは2.5mmである。

①

4はC-9区より出土した鉄ノミである。長さは15.2cm、断面は $2 \times 1.4 \times 1.5$ cm程度の台形を呈し、全体としては方柱状のノミである。先端は抉入石斧状の片刃になっている。柄の部分は外径2.6cm、内径2cm、深さ5.9cmの円形の袋部を有する。袋部には木柄が残っている。

5はC-7区より出土した鉄先である。刃先、折り返しの部分等の約3分の1を欠失しているが、全体の形は復原できる。横幅の外のりは10.5cm程度(復原値)、横幅の内のりは9.8cmである。根幅は6.1cm(復原値)で、背厚は5mmである。

以上3例の鉄器はすべて確実な造形に伴うものでなく、流れ込みの状態の出土である。したがって時期を確定する積極的な証拠はないが、前述のように、土器の大部分は弥生終末期に属し、それ以外に属する土器は数点にすぎない。したがって、この鉄器の時期は、弥生終末期のものとする可能性が最も大である。

##### 石器(2・3)

2はD-9区より出土したものである。頁岩質砂岩を丁寧に加工した石錐である。両端を欠くのでどのような形になるかはわからないが、福岡県教育委員会調査の際に出土した石錐の例から、両端に小孔を穿った石錐として考えるのが妥当である。

3はB-4区より出土したものである。石質は、輝緑凝灰岩である。これは礫を打ち欠いた剥片であり、一面は自然面を残し、他は打ち欠いた面をそのまま残している。断面は刃を有しているようになっているが、石器として使用されたかどうかはわからない。

その他に鉄鋸、炉壁又は炉床の附着した鉄滓数点が出土しているが、これは九州大学工学部冶金学教室の板山武彦氏に分析を依頼した。

分析結果は別掲のとおりである。

(橋口達也)

- ① 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970 参照

市教育委員会調査の際、2号石棺より出土した鉈の長さは18cmである。

## 福岡市拾六町宮の前出土の野多々良津について

九州大学工学部鉄鋼冶金学教室 坂田武彦

熊野、野多々良津のX線回折による判定の結果は、X線回折の示す通りであって、ピークは主として Fayalite の存在を示しているがピークの一部には Jacofsite の折出も行なわれている。Jacofsite の化学性は  $MnO \cdot Fe_3 O_4$  の組成であって、原鉱の砂鉄中には  $MnO$  としての含有量は非常に少ないので、なぜ Jacofsite の晶出が行なわれたか。ここで考えねばならぬことは、 $MnO$  を含む鉱石が製鉄に使用されではないかということであるが、唯今のところ製鉄跡より含マンガンの褐鉄鉱のかけらは発見されていないが、これからの調査にはこの点について充分注意する必要がある。

鉄滓（カナクソ）の主要成分は Fayalite であってこの化学性は次の状態図によって検討することができる。

製鉄原料である砂鉄が木炭によって加熱還元が行なわれると次の反応が起こる（図1、2。）

$Fe_3 O_4 + C \rightarrow 3 FeO + CO$ 、生成した酸化第一鉄（ $FeO$ ）は  $1080^{\circ}C$ において炉材の  $SiO_2$  と化学結合を行ない Fayalite を生成する。以上の結果により、拾六町宮の前より出土せる鉱物は、多々良式製鉄の鉄滓であることが立証される。

出土鉄滓の化学成分については、1個1個その成分値が異なるので今回は行なっていない。

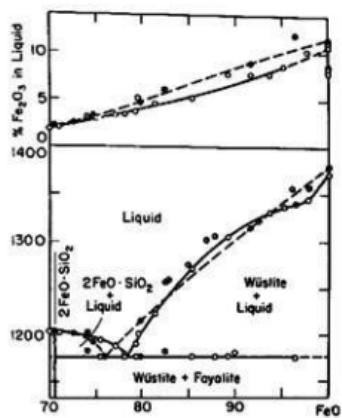


FIG. 81.—System  $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_4\text{-FeO}$ .

W. C. Allex and R. B. Snow, *J. Am. Ceram. Soc.*, **38** [8] 268 (1955);  
 $\circ$  =  $\text{N}_2$  atmosphere;  $\ominus$  =  $\text{CO}/\text{CO}_2$  atmosphere;  
 $\bullet$  = Bowen and Schairer, *Am. J. Sci.*, 5th Series, 24  
[14] 177 (1932);  $\ominus$  = R. Schuhmann, Jr., and P. J. Emissio,  
*J. Metall.*, **3** [5] 401 (1951).

第1図

### Fe-Si-O

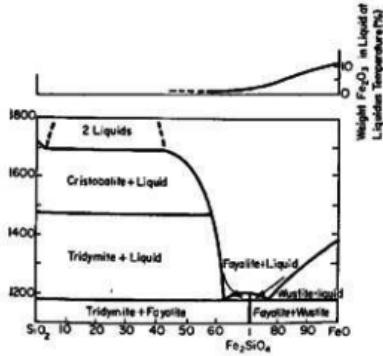
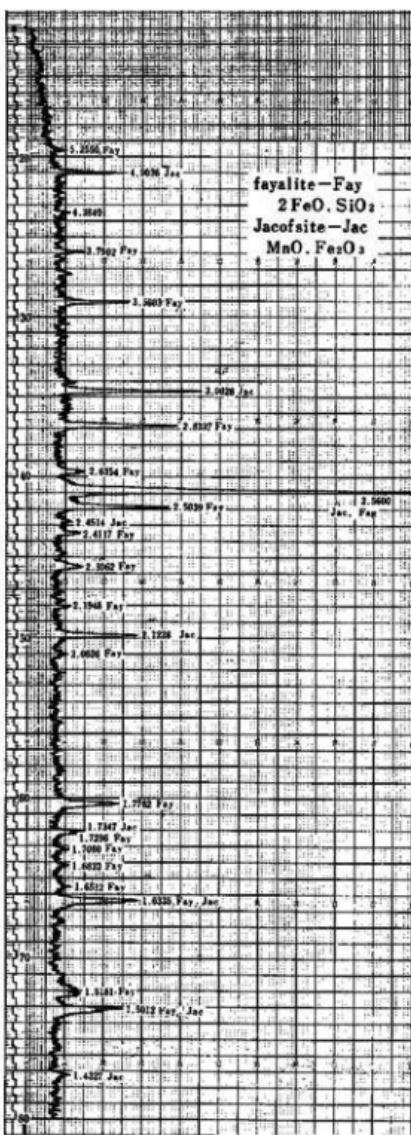


FIG. 80.—System  $\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ .

N. L. Bowen and J. F. Schairer, *Am. J. Sci.*, 5th Ser., 24,  
200 (1932).

第2図



第六回宮の前野多多羅津 鉄津 X 線回折  
50~80 Co(Fe)  
0.1~0.5~4000

### 第三章 結び

すでに述べてきたように、宮の前遺跡は過去二度の発掘調査を受けている。福岡県教育委員会の調査（1969年8月）は、一部分のトレンチを発掘したのみであったが、この遺跡が北九州弥生時代終末期に属する集落であることを明らかにした。同年春に調査を受けた筑後市狐塚遺跡において、それまで不明の点の多くあった北九州弥生時代終末期の土器、いわゆる西新町式土器の編年を明らかにした私達は、<sup>①</sup>次の課題として北九州海岸沿いの諸地域で狐塚併行期の遺跡を把握しようと試みていた。したがって県による宮の前遺跡の調査の結果は、私達にとって注目すべきものがあった。その後、福岡市教育委員会が隣接部分を調査することとなり、1969年12月から翌年1月にかけて実施され、終末期の住居址群、それとは併行する時期の高塚墳墓とが調査された。また、この調査によって狐塚併行期の土器相もかなり具体的に把握されるにいたった。このように県・市町教育委員会がそれぞれ発掘した宮の前遺跡は、ことに市教育委員会の調査において、その姿相をほぼ把握された。今回の調査区は市のD地点、県のE地点とともに丘陵の頂部平坦地に位置し、宮の前集落の全体を明らかにするためには必要なものであった。

調査の結果、次の三つの成果を挙げることができた。

一つは、市のD地点、県のE地点、そしてF地点を連続して載せるこの丘陵の頂部平坦地の住居址群の姿を全体としてつかめたことである。すでにD地点で約8軒、E地点で約6軒の住居址が知られていたが、今回さらに3軒を追加することができた。このうち、同時併存の可能性は大きく見積ってD地点6軒、E地点4軒、F地点1軒の、計11軒であり、さらにE地点に相当数の住居の存在が考えられる。住居址相互には、その規模・構造などの点に明瞭な差異を認めることはできなかった。11軒の住居址は丘陵の狭長な頂部平坦部の北側を中心として列をなして配されている。いずれにせよ、最近明らかにされつつある終末期の集落規模からすれば、地形的制約があるとはいって、小規模の感をまぬかれない。おそらくは、B地点住居址、丘陵下の湯納遺跡、あるいはF地点東側斜面下から熊野神社へかけての平坦部に想定される住居とともに一体をなし、地形的条件によって小群に細分化され中期的な様相を示しているが、本来一つの集落を構成するものであろう。そうすれば、B地点に単独で所在する大規模な住居址、あるいはC地点の小首長墓的な高塚墳墓の性格が、より理解されやすくなろう。

二つは、前二回の調査同様、今回も多くの鉄器の出土をみたことである。出土の鉄器は、鋤先・鎌などの農具、斧・鎌・ノミなどの工具・鎌などの武器など多種にわたり、これまで言われてきたように弥生時代後期における鉄製品普遍化の現象を頗著に裏書きしたものと言えよう。

三つは、これまで時期・性格ともに明らかでなかった半球形有孔滑石製品が、すくなくとも弥生時代終末期の一点に存在することを明らかにした点である（この点に関しては付録で考察を行なっている）。海岸に近接するとはいって、海岸との間に一つの丘陵を挟み、海拔約30mのこ

の丘陵上に多くの石錐など、漁具と考えられる遺物が存することは、この集落での生産の一つに漁業に関するものがあったことを裏付けている。そして同時に、半球形有孔滑石製品の性格に漁具としての用途をうかがわせるものである。

拾六町周辺の早良平野北西部は湿地帯で最も早く開発が始まるところであり、湯納遺跡を含む、広義の宮の前集落は、中期後半から集落が形成されはじめる。これはようやく鉄器が普遍化しはじめ、生産力の発展によって、北九州全体からいっても、畠地の開墾とともに、湿地の干拓もはじまるところである。当初この湿地帯の可耕地周辺に居住した集団も、鉄器の普遍化による生産力の増大によって人口も増大し、居住地域はしだいに丘陵部へと進出していった。そして終末期に至るまでの弥生後期社会の発展の中で、現段階では必ずしも明瞭でなかった弥生後期前半からの発展が、ある程度明らかになったといえる。この集落と同時期の封土をもつ墳墓は、湯納・宮の前等の拾六町周辺の集落を背景として出現したものであり、早良町重留の石棺等も同様に考えられる。これは古墳発生の諸問題を追求する上でも貴重な成果といえよう。<sup>⑤</sup>

このような成果の反面、意図しつつ実現できなかった点もある。市教育委員会調査の結果、いわゆる西新町式併行期の土器相がかなり明らかとなつたが、そのセット関係において壺形土器を量・質的に欠いていた。今回は、それを補完する意味において多くの期待をいたいでいた。しかしながら、調査区のごく一部に遺構が存在していたにすぎず、しかも保存状態は樹根による擾乱などによってきわめて悪かった。出土の土器にしても、からうじて住居址の時期を示すにとどまり、編年資料となりうるものではなかった。この時期の土器相の変化は、ことに壺形土器に顕著にあらわれており、その意味において、市教育委員会調査の補完を果せなかつたことは惜しまれる。

結果的に、今回の調査で福岡市教育委員会の成果に付加できた点は、本来同一遺跡である D・E・F 地点の範囲を確認したことにつきる。そして多くの点で、市のそれと類似した結果を得ることができた。一部調査員は双方の調査に参加しており、したがって本報告では「遺跡の立地と環境」「考察」などの項を市報告書に譲った。県報告・本報告ともに併記していただければ全体の把握がより明確になろう。

(橋口達也・高倉洋彰)

① 九州大学考古学研究室編『狐塚遺跡』八女市教育委員会 1970

② 例えは熊本県諭訪原遺跡のように數十軒に及ぶ集落があり、ほぼこの時期から大規模化する。

③ 浜田信也『湯納遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 1970

④ 高倉洋彰・下条信行「集落について」および「結び」宝台遺跡 1970

⑤ 九州大学考古学研究室編『有田遺跡』福岡市教育委員会 1968

= 付 錄 =

半球形有孔滑石製品について

はじめに

福岡市拾六町宮の前F地点2号住居址より半球形有孔滑石製品が出土した。（第5図参照）これは現在まで名称・時期・用途ともに確定されていなかった。ここで名称を半球形有孔滑石製品と呼称することとした。この半球形有孔滑石製品の時期は弥生終末期のものであろうとはば推定されており、又用途も南方民俗例からいろいろの推測がなされているが、未だ公表されていない。そこで私達は、現段階における半球形有孔滑石製品の出土地と時期決定を行い用途<sup>①</sup>確定のための研究資料として提示したい。

(1) 遺物の実例

半球形有孔滑石製品の出土地は第1表に示すとおりである。

第1表 半球形有孔滑石製品出土地名表

地名	大きさ 径×高(cm)	重量 kg	孔	出土状態	備考
1 福岡市姪ノ浜浦山弁天町	12 × 8.1	1,820	2孔	住居址	1935年3月出土 九大産
2 *	11		2孔	*	*
3 * 比恵 古賀			2孔		1938年、環溝住居址調査の際出土 森貞次郎氏御教示
4 * 香椎 松崎舞松原			2孔		森貞次郎氏御教示
5 * 有田、西福岡中学校藏品	19.4 × 10	5,800	2孔		西福岡中学校藏
6 * 大鍋（現博多駅）	12.2 × 7		2孔		長崎市清島省三家藏 1960年坂田鉄規博多駅工事中出土
7 * 圣福寺藏品			1孔		聖福寺藏
8 福岡県糸島郡前原町潤古屋敷	11.8 × 9.2	1,940	1孔		1953年12月18日出土上九十九大藏
9 佐賀県唐津市徳須恵			2孔		本委考古学会による唐津調査時の 周辺調査の際出土
10 長崎県平戸市度島中学校藏品	11.4 × 8.2 (底径10.5)		2孔		京都大学平戸学術調査報告 1951
11 鹿児島県大島郡知名町					1967年3月三島格氏実見
12 福岡市拾六町宮の前	9.8 × 5.1 (復原値)		2孔	住居址	1970年7月調査

福岡市姪浜浦山弁天町の住居址より出土した半球形有孔滑石製品は2例ある。1例（第10-2、図版11-2）は底部径11.3cm、最大径12cm、高さ8.1cm、重量1,820gをはかる完形品である。2孔をもち、中心部の孔は径2.2~2.8cmで、上下両方から穿孔している。小孔は径0.7~1.9cmでこれも両方から穿孔している。表面には横方向にノミで削って仕上げた痕が観察される。他の1例（図版11-1）は底部だけを残すのみで径は11cmをはかる。

福岡市西福岡中学校藏品（第10図-5）は大形の完形品であるが半球形と呼ぶにはふさわしく

ない。径は19.4cm、高さ10cm、重量5,800gである。横方向に削って仕上げており、稜が明瞭に観察できる。底部の近くは縦方向にノミで削っている。中心部の孔は両方より窄孔し、下半分は窄孔したのち横に削って仕上げている。孔径は3~3.6cmである。小孔は明瞭に両方より窄孔した痕がうかがえる。孔径は0.8~2.4cmである。

福岡市大鶴（現博多駅）出土の例（第10図-4）は、底部径10.6cm、最大径12.2cm、高さ7cmの完形品である。表面の仕上げは良好で、磨きが丁寧なために稜はほとんど認められない。底部は上げ底を呈している。中心部の孔は上下両方より窄ち、径は2.3~3cmをはかる。孔径0.3~2cmの小孔は両方より窄孔した痕が明瞭である。これは現在、長崎市中川町清島省三氏の蔵品となっている。

福岡市聖福寺蔵品（図版11-5）は径13.4cmで、中心部の1孔を有する完形品である。

福岡県糸島郡前原町洞古屋敷出土品（第10図-1図版11-3）は、聖福寺蔵品と同様に中心部の1孔を有する完形品である。孔径は2.1~3.1cmで上下両方より窄孔している。表面はノミで仕上げた痕が明瞭に観察できる。底部径8.3cm、最大径11.8cm、高さ9.2cm、重量1,940gをはかる。

長崎県平戸市度島中学校蔵品は、京都大学平戸学術調査團によって報告されたものである。<sup>②</sup> 底部径10.5cm、最大径11.4cm、高さ8.2cmで、中心部のは上下両方より窄孔しており、孔径は2.1~3.7cmである。小孔も両方より窄孔した痕が明瞭である。孔径は0.9~1.7cmをはかる。

鹿児島県大島郡知名町の例は、信仰の対象となっている旧屋敷跡の集石の中で、三島格氏によって発見されたものである。滑石製であるかどうかは分らない。

他に鹿児島県嚙味郡志布志町公民館に類似品があるとのことである。<sup>④</sup>

## (2) 時期の決定

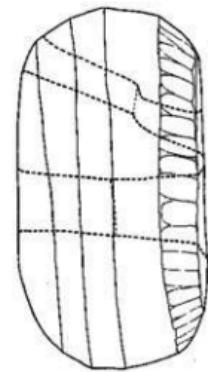
半球形有孔滑石製品の時期は、拾六町宮の前下地点2点住居址の伴出土器によって、弥生終末期のものとして確定できたが、この石器の資料収集の際に、福岡市大鶴（現博多駅）出土の半球形有孔滑石製品と伴出した土器の好資料を得たので紹介して時期決定の補強をしたい。

この資料は現博多駅建設工事中に出土した一括資料である。<sup>⑤</sup>

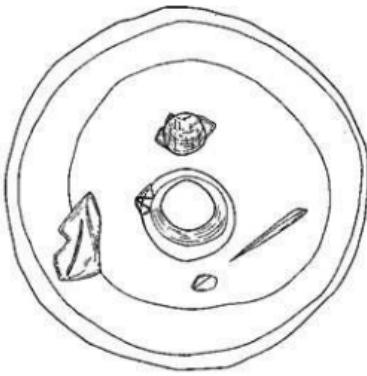
第11図-1は口縁径8cm、器高7.4cmの小形鉢である。器高は非常に都厚いが口縁部内面は若干細くなり、稜をつくる。底部は丸底に近い平底を呈する。外面上部は6本単位の櫛で縦横に調整し、下部は櫛で調整したあとをヘラで削っている。内面口縁部は刷毛で横方向に調整し、稜より下部は粗い櫛で調整したのちにヘラで削っている。底は指でおさえている。胎土には砂粒を多く含むが焼成は堅緻である。色は灰褐色を呈し、一部は黒変している。全体としては、非常にいびつで手づくね土器と思われる。

第11図-2は、脚台付鉢の脚部である。脚部の器壁は薄いが、鉢の部分は都厚い。胎土には砂粒を含み、焼成は堅緻である。調整は内外共に細い刷毛で行っているが、脚部末端部の外面は横になでて刷毛目を消している。

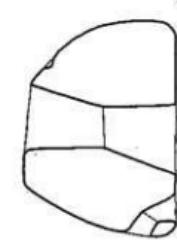
第11図-3は、蓋形土器の頂端部である。細い砂粒を少々含むが胎土は精製された粘土を用



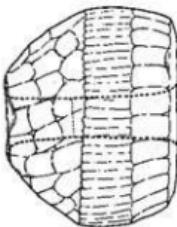
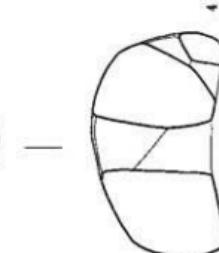
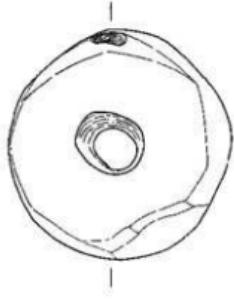
5



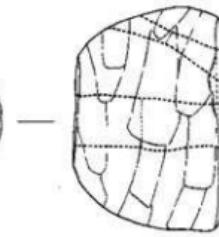
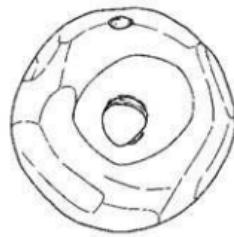
10mm



3



1



第10圖 半球形有孔滑石製品実測図  
 (1. 福岡県前原町洞、2. 福岡市姪之浜浦山、3. 長崎県平戸町度島中学校藏品、  
 4. 福岡市大洞(現博多駅)、5. 福岡市有田(西福岡中学校藏品))

いており、焼成は硬い。色は薄い褐色を呈する。外面は細い刷毛で縦方向に調整したのち、一部をヘラで削り、刷毛目を消している。

第11図-4は器台である。器高16.4cm、口縁径11.6cm、底部径14.6cmをはかる。胎土は砂粒を含むが、焼成は堅緻である。内外面ともに丹塗りをほどこしている。外面は叩き整形をほどこしたあとに細かい刷毛で縦方向に調整しているが、口縁部裾部末端までは刷毛目を入れず叩き痕が明瞭に残っている。内面はしばりの痕が残るが下半分は横方向に刷毛で調整したのち、指でおさえて刷毛目を消している。

第11図-5は杏形容器台である。突出部を若干欠くが完形品といえる。器高は9.6cm、底部径9.6cm、上面の径5.5cmである。胎土には細粒の砂を含み、焼成は堅緻である。色は褐色を呈する。外面は縦方向に櫛で調整したのち、なでて櫛目を消している。底近くには横方向の櫛目が残る。内面は櫛で横方向に調整した後に横になでて櫛目を消している。上面は粗い櫛で削り、稜部は櫛で刻目を入れている。

第11図-6は、5と同じく杏形容器台である。器高11.3cm、底部径14.7cmをはかり、この種の土器では超大形品といえる。これも突出部の一部を欠いている。器壁は厚く、胎土には砂粒を含み、焼成は硬い。色は褐色を呈する。内外共に粗い櫛で調整をほどこしている。外面には一部ヘラで削った痕もみられる。

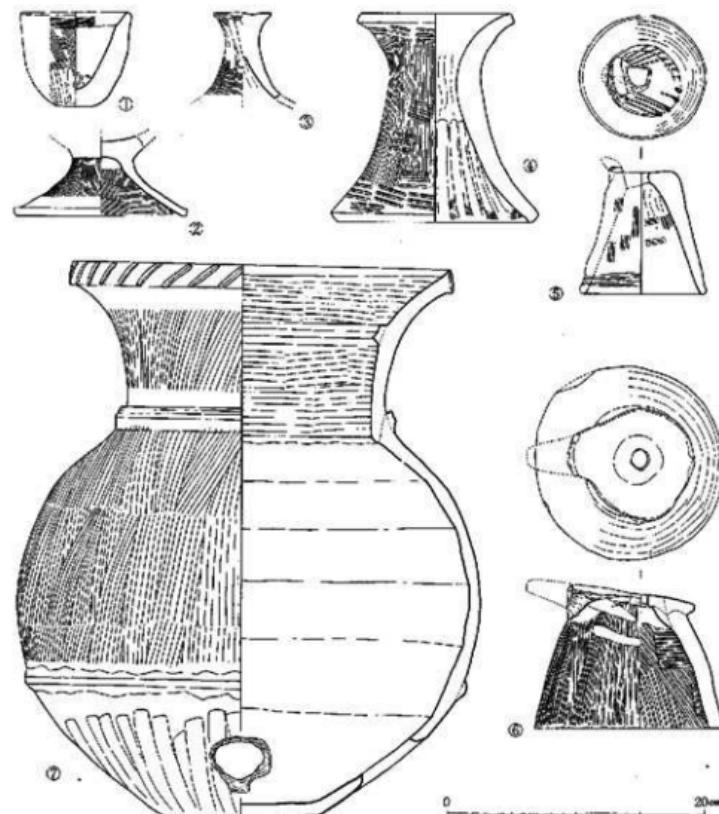
第11図-7は大形の壺で、器高43.5cm、口縁径29.3cm、底部径12cm、ほぼ胴部中央部あたりの高さ17.5cmのところに胴部最大径があり、36cmをはかる。器壁は厚く、胎土には精製された粘土を用い、焼成は堅緻である。口唇部にはヘラで大きな刻目を入れ、肩部・胴下半部に貼付凸帯を有し、頸部内面の口縁下5cmのところに蓋うけの凸帯を有する。外面の調整は縦方向に粗い櫛で行っている。胴凸帯より下はヘラで削り、櫛目を消している。頸部内面は横方向に粗い櫛で調整し、胴部は縦横に櫛目が入り乱れるが、上半部は縦方向が多い。又内面は粘土帯の縦目が明瞭に観察できる。この土器は底部は丸底に近くなつた平底を呈し、全体としては胴は球形に近い。この壺は底部に近く、径5cm程の孔が焼成後内側より穿たれているので、小児用の壺棺として転用されたものと思われる。

以上7点の土器を紹介したが、これらは3を除いてすべて弥生終末期のものである。7は終末期の中では比較的古い部類に属すると言えよう。3の蓋は現在のところ後期の蓋の資料を欠くので何とも言えないが、前期・中期の蓋形土器とは若干形態を異にしており、又7の壺に蓋うけの凸帯もあるので、あながち終末期に属する可能性を否定することはできない。これらの上器には、二重口縁に櫛目波状文、竹管文がほどこされた土器をも伴出しており、したがつて福岡市大飼の全体としての時期は弥生終末期から、それをやや下る時期（弥生～土師期への転換期）までとすることができます。拾六町宮の前F地点1号住居出土の壺の中にも、時期的には若干下る可能性のある土器（第4図-3）も存在している。したがつて半球形有孔滑石製品の時期は、弥生終末期からそれをやや下るまでの時期（弥生～土師器の転換期）を設定することができる。

### (3) まとめ

半球形有孔滑石製品は、海岸に望む所、又は当時海岸附近と推定できるような砂丘上の遺跡、又は河の下流域に分布している。このことは漁具としての用途をもつ石器としての可能性を大きくしている。福岡県教育委員会の調査の際に大形の不定形な有孔滑石製品が出土し、報告書はこれを大形漁網用、又は小形舟の錨とも考えられるとしている。<sup>⑦</sup> 重量 2,000g 程度では碗として考えるのは困難である。しかし、県・市教委、それに私達の調査したなかで、多くの石錨を出土しているのでこれらとの関連からみても、漁具としての用途をもつものと考えるのが妥当である。

この石器は現在の分布からみても今後九州各地の海岸部附近より出土例を増すと思われる。又用途を明らかにするにはいたらなかったが、南方との関連を示す数少い資料の一つである



第11図 福岡市犬飼(現博多駅)出土土器実測図

で、南方民俗例との比較研究を今後の課題としたい。現在まだ不充分な資料収集の段階であり、不備な点を御教示願えれば幸いである。

(横口達也)

- ① 漁具説、分銅説等の諸説がある。
- ② 京都大学平戸学術調査団「平戸学術調査報告」1951
- ③ 「台湾の民俗例で石斗母と呼ばれる、秤の分銅に使用された石製品に類似しているので記憶にあたらしい」との三島裕氏の御教示があった。
- ④ 上村俊雄氏の御教示による。孔の有無、石材はわからないので今回省略した。
- ⑤ この資料は一部をぞいて、福岡県浮羽郡浮羽町田主丸、中央ホテル蔵となっている。そのうち第11回、2・3・5・6、は九大考古学研究室に寄贈を受けた。
- 第11回-1は長崎市 清島氏蔵となっている。
- ⑥ 森貞次郎「弥生文化の発展と地城性—九州」日本の考古学III P.55、図9-6
- ⑦ 福岡県教育委員会「今宿バイパス開通埋蔵文化財調査報告」第1集 1970

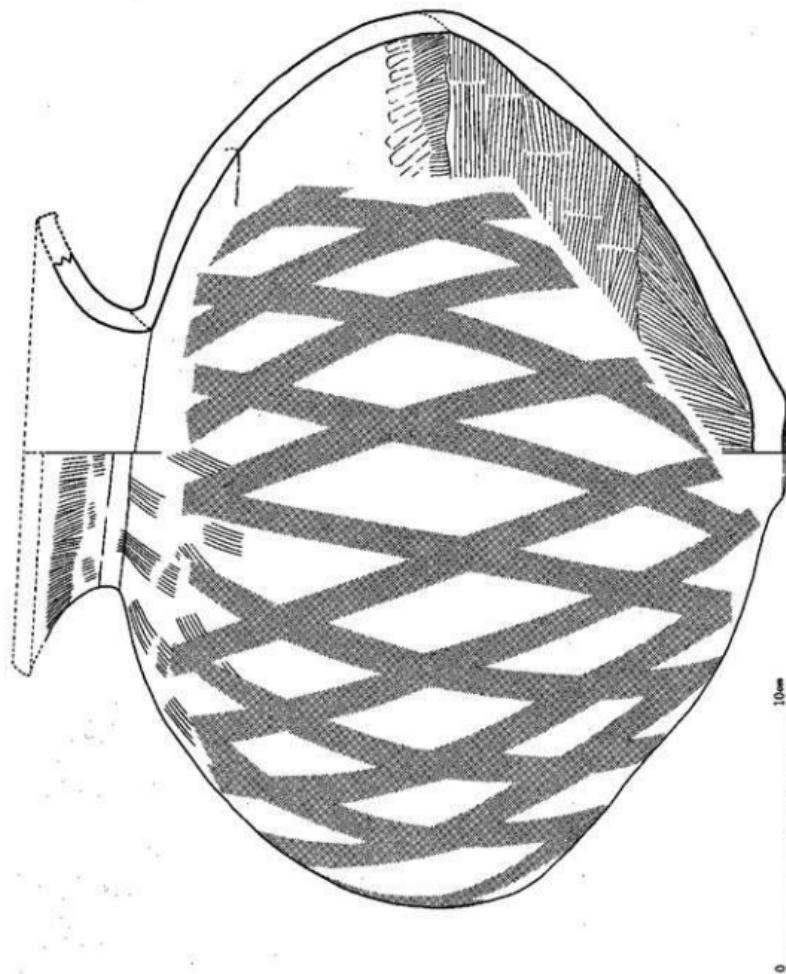
(追補) 博多駅地下工事中出土の網目土器 (第12回)

福岡市大洞、博多駅地下工事中に出土したものであり現在、九州大学文学部考古学研究室に保管されている。前述の半球形有孔滑石製品を伴出した土器と出土地点が異なり、近世の遺物等を伴出している。

口縁部木端を欠し、現在高は37cmを測るが復原高は38~39cm程度と考えられる。胴最大幅は中央部にあり33.2cmである。頸部は外反し、くびれて胴部につづき底部は径3.5cmで丸底に近づきつつある平底を呈している。胎土にはほとんど砂粒を含まない精製された粘土を用いており、焼成は硬い。色は黄褐色を呈するが部分的に丹塗りの痕跡があり、本来は丹塗りの壺であったと思われる。調査は、頸部外面はハケで櫛に行い、頸部と肩部の接合部は櫛になでている。胴部外面はハケで調整した後、丁寧にヘラで磨研しているが、肩部は磨研が粗く、ハケ目が部分的に残っている。頸部内面はヘラで磨研し、胴上半部内面は縱方向にハケで調整した後になでてハケ目を消し、胴中央部にはヘラで削った痕跡もある。下半部はハケによる調査を行っている。胴部内面には接合の痕がよく残り、ハケの方向もその接合部を境として方向が異なっている。時期は前述の半球形有孔滑石製品を伴出した土器等と同様弥生時代終末期に属するものであり、形態的には東九州の土器の要素を多分に認められる。特記すべきことは、第12回に示すように網目の痕跡が認められることである。この網目は擦痕として残っているので、網に使用した用材はわからないが、網目は斜方向に編んでおり大きな菱形を呈している。肩部、底部は擦痕が残っていないので、末端部はどのような編み方をしていたかはわからない。この網目で壺を覆う例は奈良県吉古遺跡の船橋式(縄文晩期)の壺などに例があり、携帯移動に際して、破損しないように土器を保護することが主要な目的であるとされている。(横口達也)

- ⑧ 末永雅雄、小林行雄、藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」

第12圖 福岡市大同(博多駅)出土土器実測図

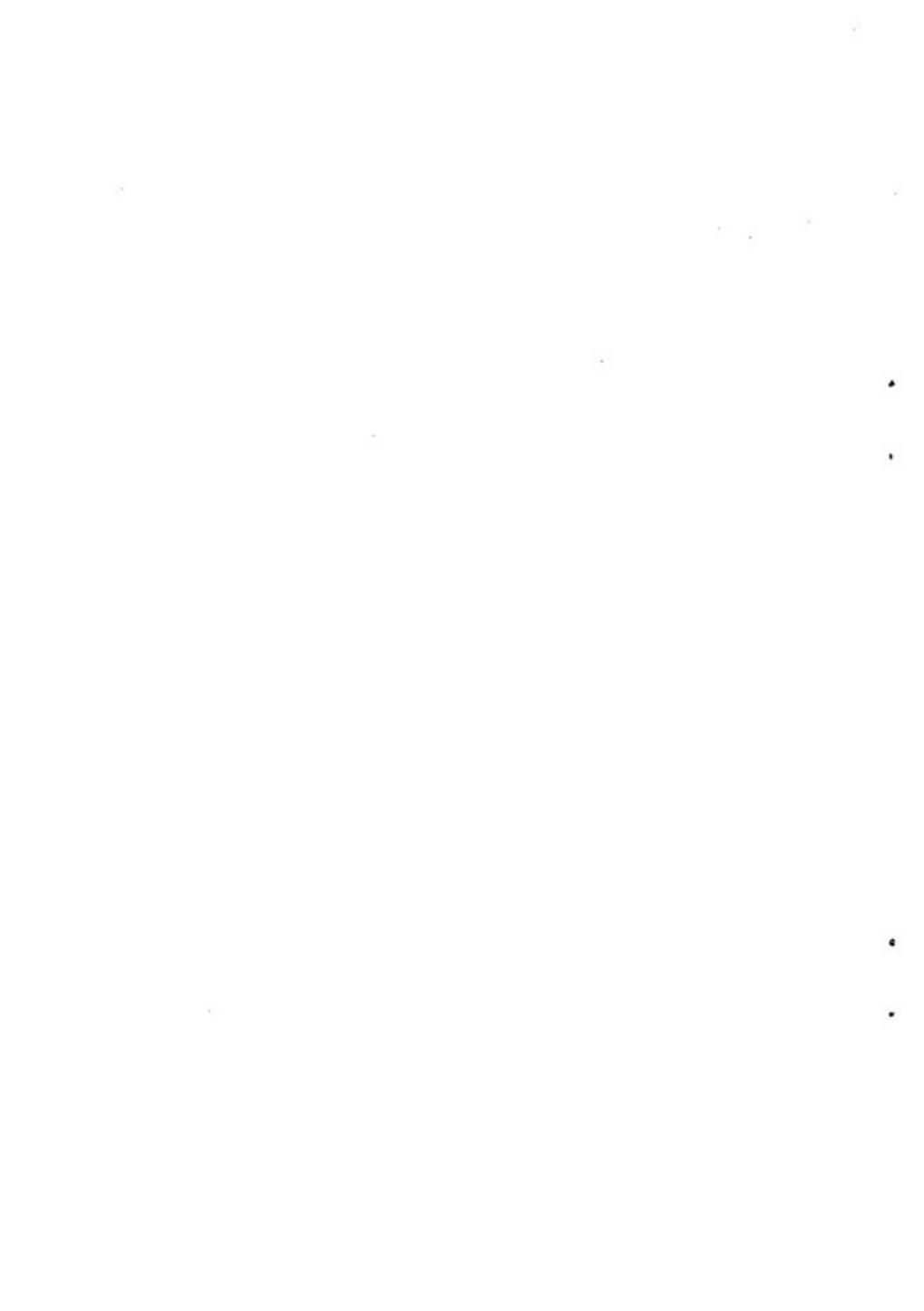




F地点遠景（南側より）



F地点遠景（北側より）





F地点 1. 2. 3号住宅全貌

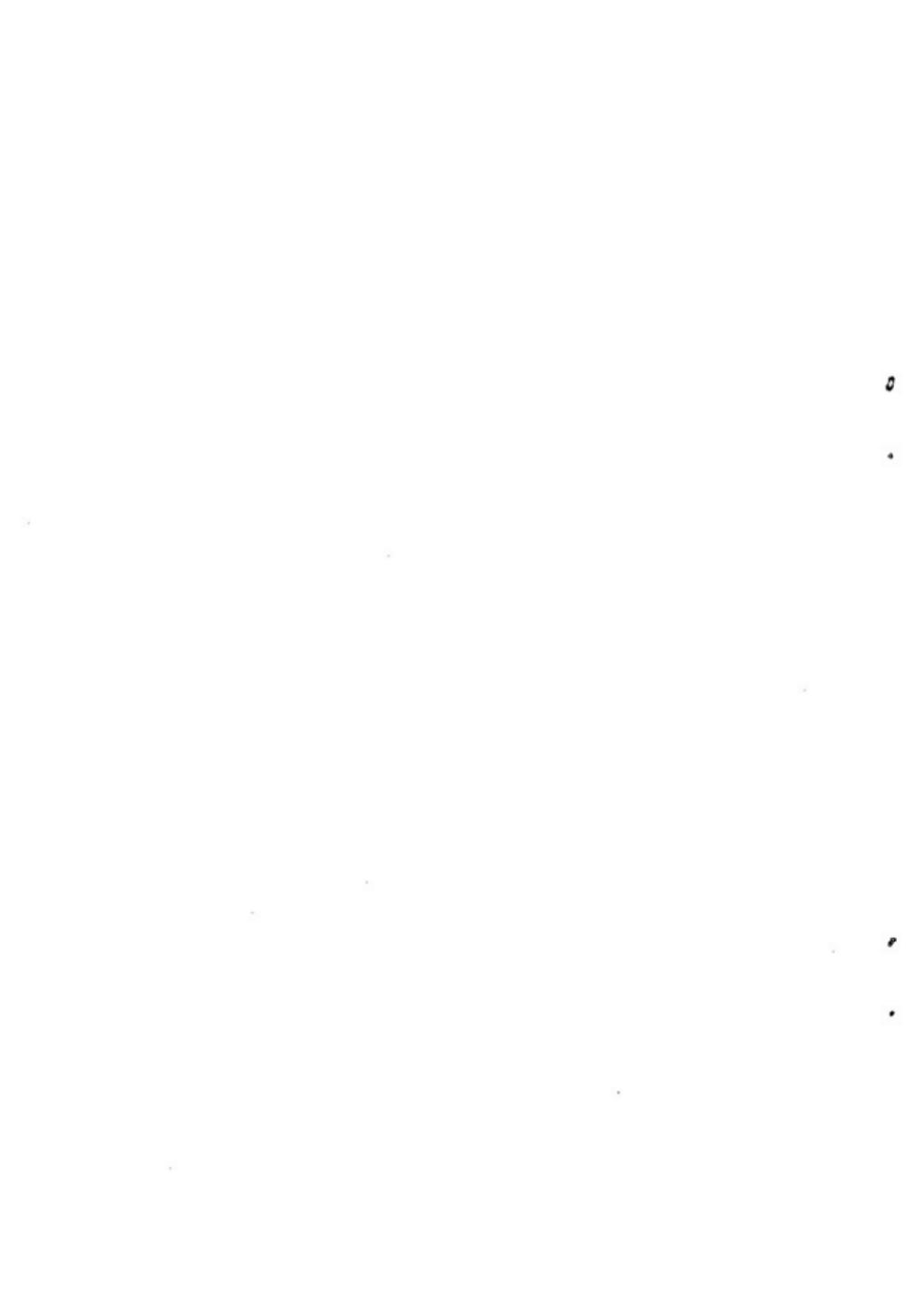


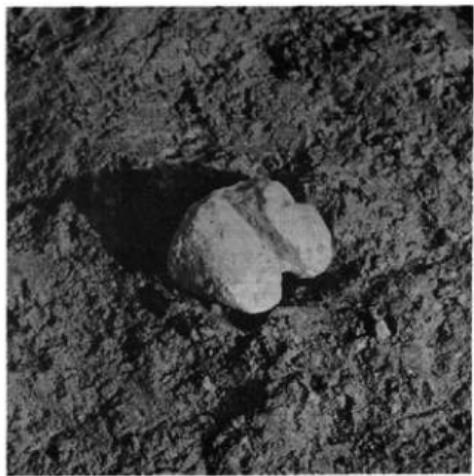


F地点1、2号住居址



F地点3号住居址



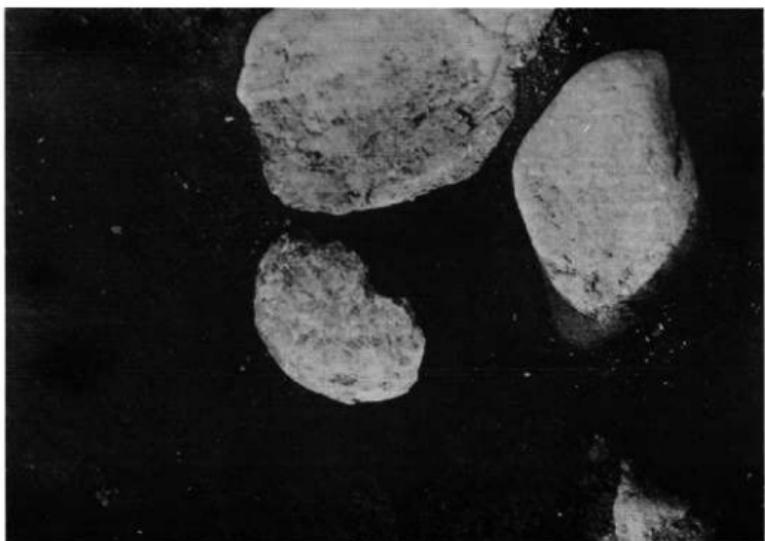


滑石製石錘の出土状態（F地点 2号住居址）

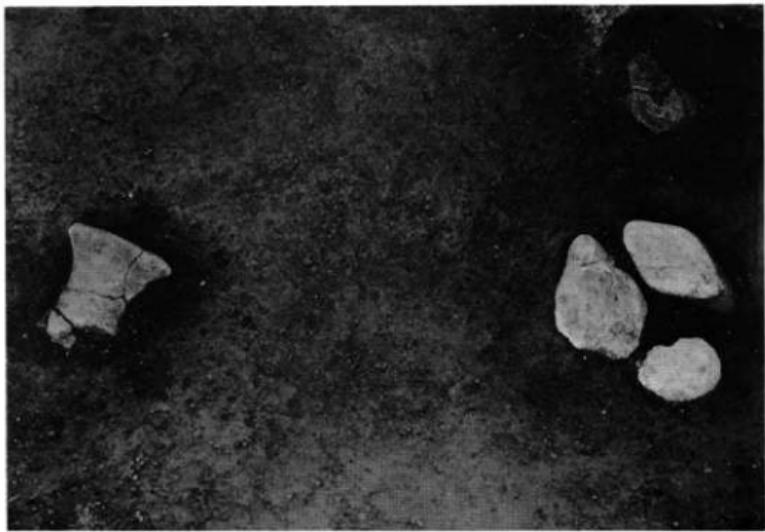


器台の出土状態（F地点 2号住居址）

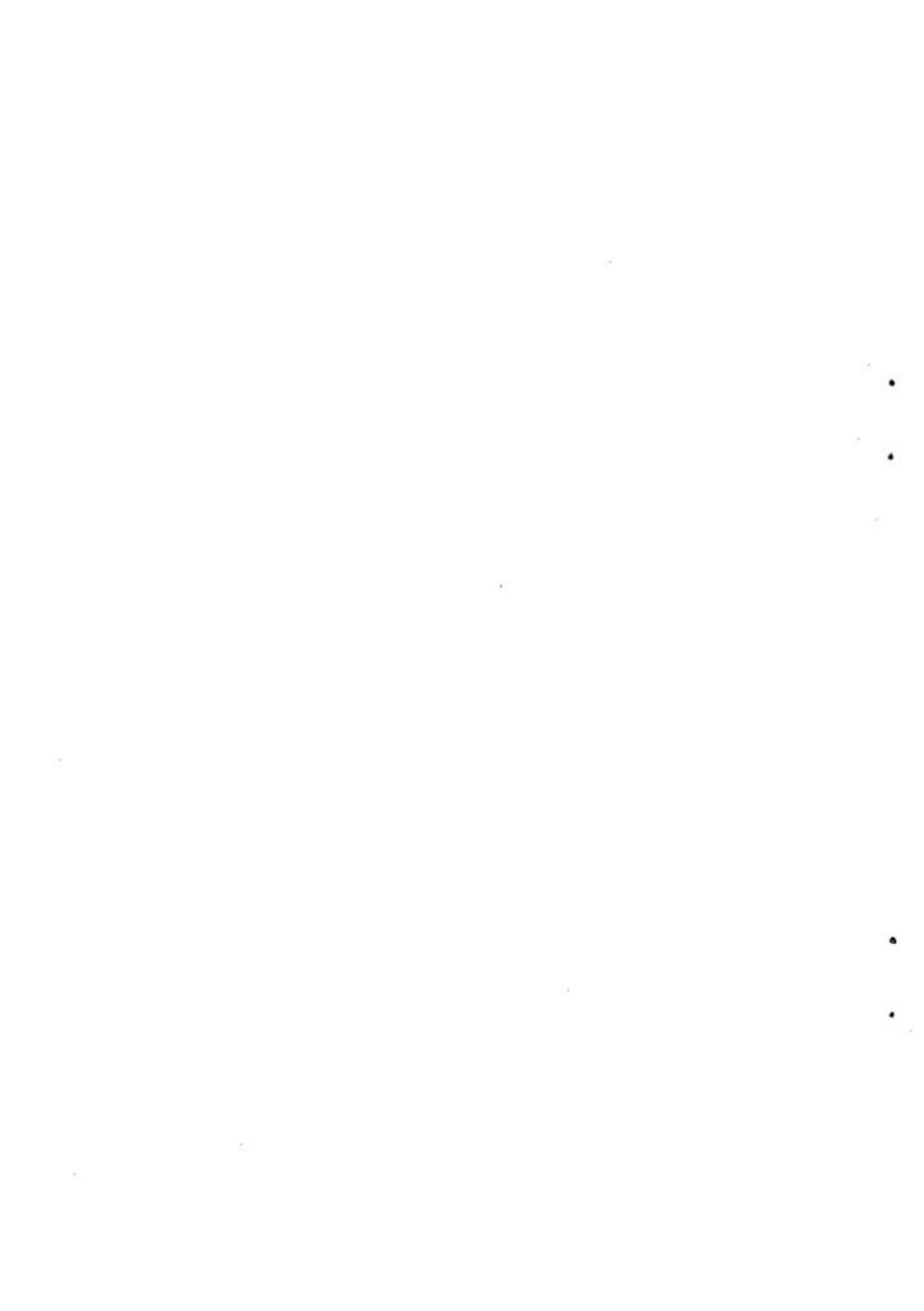




半球形有孔滑石製品の出土状態（F地点 2号住居址）



器台と半球形有孔滑石製品の出土状態（F地点 2号住居址）

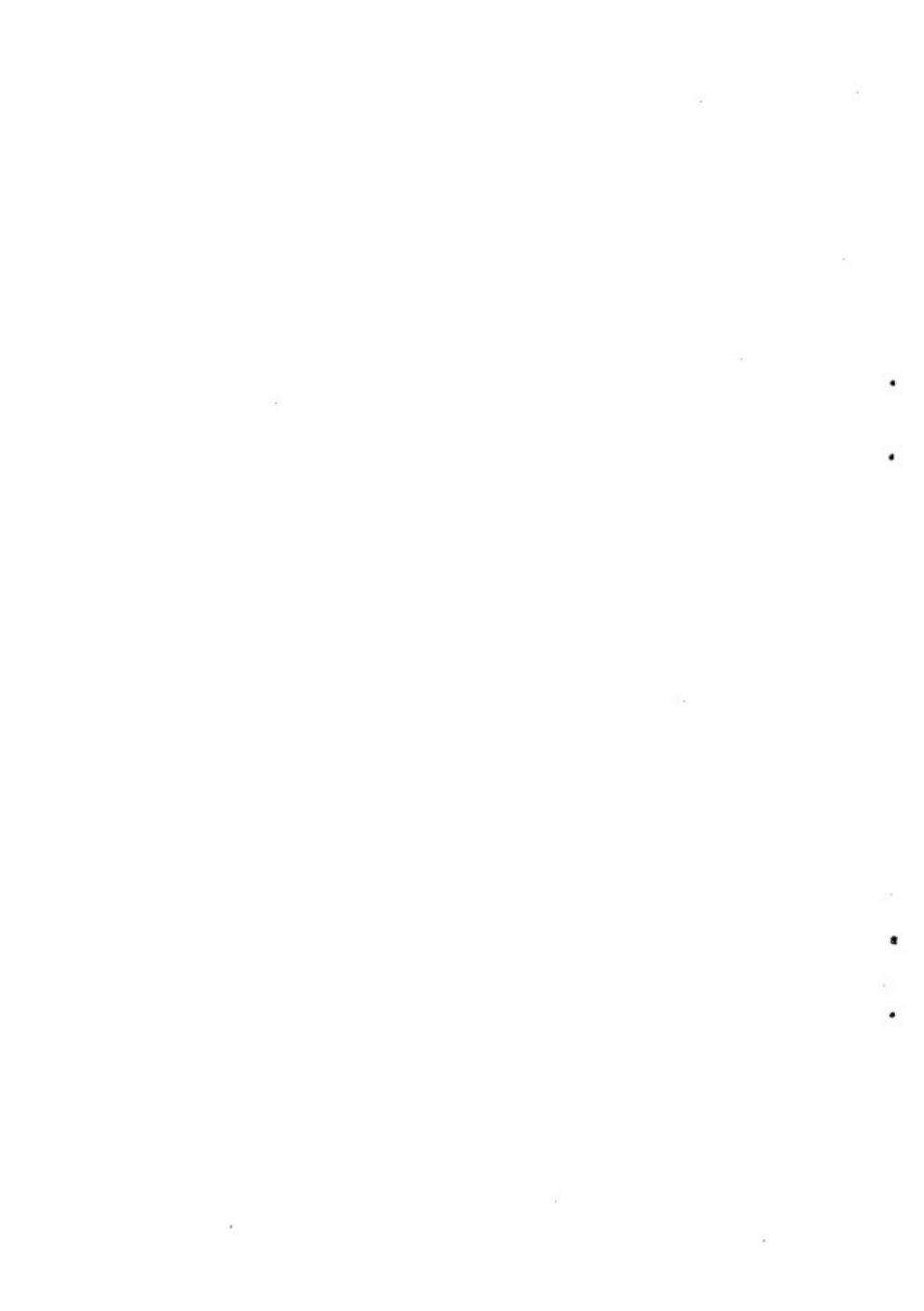




小形九底壺の出土状態（F 地点 3 号住居址）



高环の出土状態（F 地点 3 号住居址）





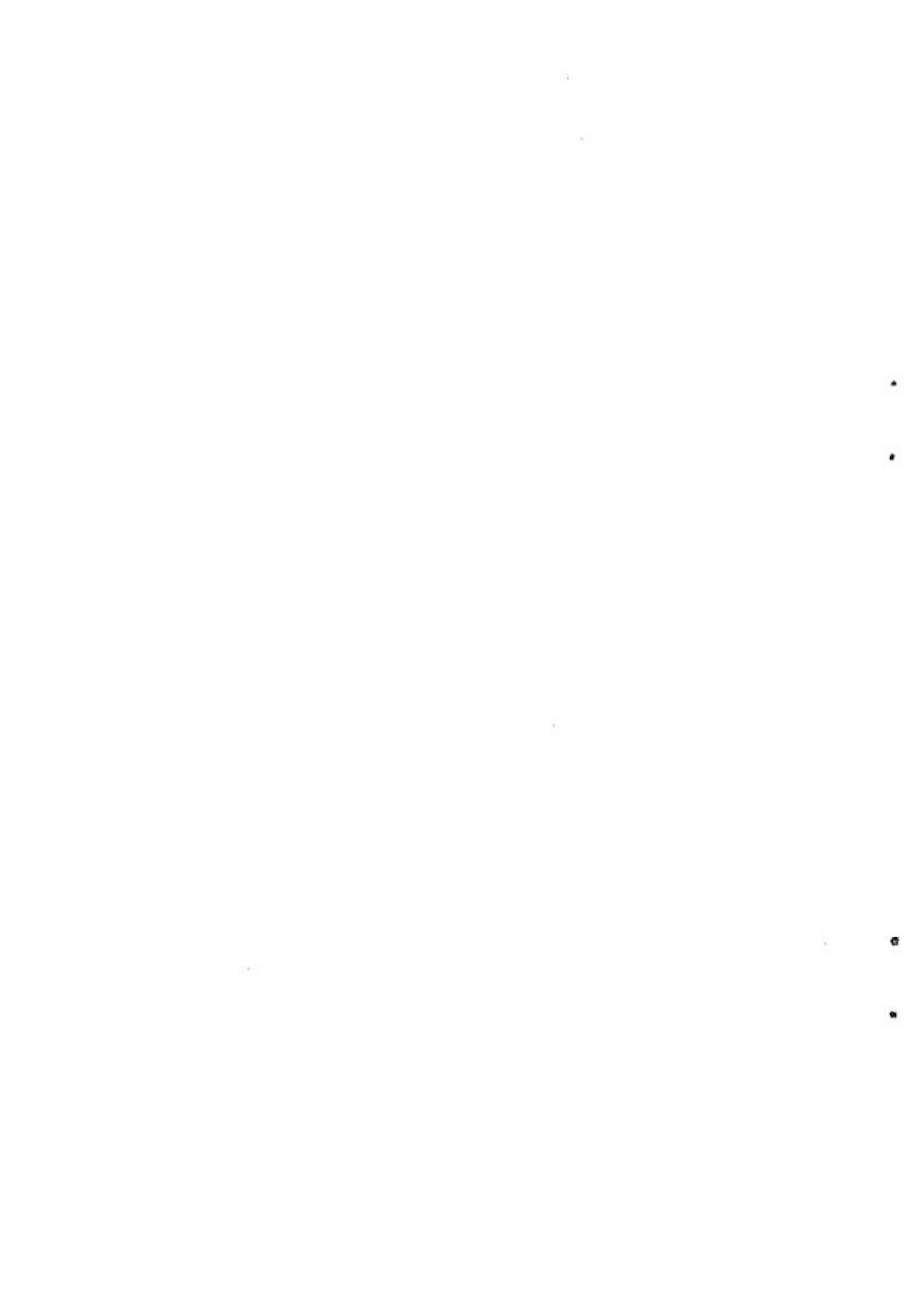
鉄ノミの出土状態



鉗の出土状態



鎌先の出土状態





小形丸底壺





1



2



3



4

(1) 鉄器 (F地点 1号住居址) (2)(3)石錘 (F地点 2号住居址)

(4) 半球形有孔滑石製品 (F地点 2号住居址)





1



2



3



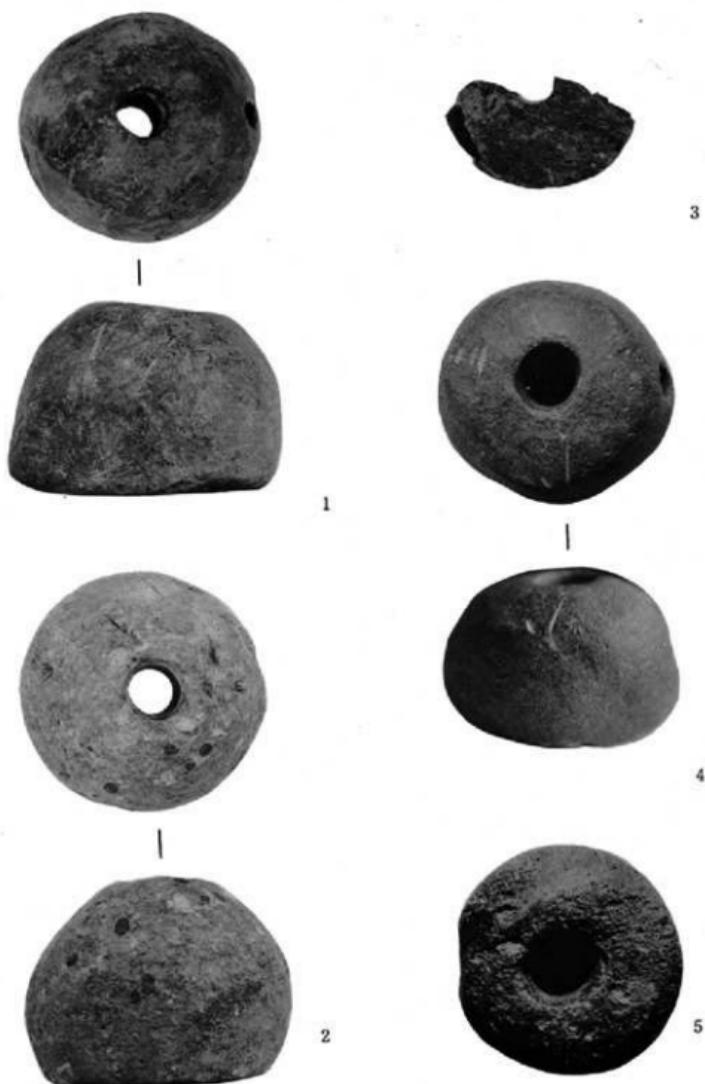
4



5

F地点出土の鐵器、鐵滓（1…鐵滓鐵先 2…鐵、3…ノミ  
4…炉壁の附着した鐵滓、5…鐵滓）





半球形有孔滑石製品

(1), (2)福岡市姪之浜 (3)福岡県前原町潤 (4)福岡市大鯛 (博多駅)

(4)福岡市大鯛 (博多駅) (5)聖福寺藏

t  
l

t  
l

宮の前遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第13集

昭和46年3月31日発行

編集 九州大学文学部考古学研究室

発行 福岡市教育委員会

印刷 株式会社 川島弘文社